

2017 (平成29) 年度

千葉県NIE実践報告書

(*Newspaper in Education* = 教育に新聞を)



千葉市立大森小学校
市川市立大和田小学校
我孫子市立我孫子第三小学校
八千代市立勝田台南小学校
八街市立笹引小学校
富里市立日吉台小学校
いすみ市立東海小学校
富津市立天神山小学校
千葉市立打瀬中学校
千葉市立磯辺中学校
船橋市立芝山中学校
松戸市立新松戸南中学校
野田市立東部中学校
旭市立干潟中学校
茂原市立早野中学校
山武市立蓮沼中学校
富津市立大貫中学校
南房総市立富浦中学校
専修大学松戸高等学校
千葉県立成田国際高等学校
千葉県立桜が丘特別支援学校

千葉県 NIE 推進協議会

ご挨拶



千葉県N I E推進協議会会長

藤川大祐
(千葉大学教育学部教授)

平素より、千葉県NIE推進協議会の活動に対して多くの方々にご協力いただき、ありがとうございます。2017年度のNIE実践報告書をこうしてお届けできることとなり、関係の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

2017年を象徴する言葉を挙げるとしたら、真っ先に「フェイクニュース」という言葉が上がるのではないのでしょうか。フェイクニュースというのは虚偽報道のことで、米国のトランプ大統領が、ロシアとの関係や世論調査の結果を報じたニュースについて、繰り返し「フェイクニュースだ」と発言したことから、注目されるようになりました。

インターネット上には、真偽の怪しい情報や明らかに誤った情報があり、情報の真偽を慎重に判断すべきことは、多くの方が認識しています。正しい情報よりフェイクニュースのほうが、人々が面白がったり共感したりしやすい場合が多く、拡散しやすい傾向にあることも理解して、インターネットで印象の強いニュースを目にした際には出典を確認する等、慎重に対応する必要があります。

ところが、トランプ大統領は、既存のマスメディアによる報道を、あたかもインターネット上のそうした怪しい情報と同レベルだと言わんばかりに、「フェイクニュース」というレッテル貼りを続けています。このことは、既存のマスメディアを貶める深刻な印象操作となっていると考えられます。

インターネットの普及で、一般の人々が容易にマスメディア批判を発信できるようになり、マスメディアは信用できないという空気が徐々に広がりつつあった状況の中で、トランプ大統領の「フェイクニュース」批判はそうした空気の広がりを加速しているように思えます。もちろんマスメディアに対して人々が批判的な目を向けることは重要ですが、批判する空気に乗っかるだけでは困ります。

私たちは、こうしたメディア状況の中で、教育を進めていかなければなりません。きちんとマスメディアの報道を見ることもせずにSNSでのマスメディア批判に同調するばかりの人を増やすのか、それともマスメディアの報道をきちんと受け止めた上で適切に批判的な目を向けられる人を増やすのかが問われているのではないのでしょうか。

NIEの推進により、学校に通う児童生徒が、学校で新聞についての理解を深め、それぞれの関心を広げつつ関心に応じて記事を活用できるようになってもらえることを願っています。今後とも、関係の皆様のご理解、ご協力をいただきたく、お願い申し上げます。

目 次

小学校

千葉市立大森小学校	1
市川市立大和田小学校	3
我孫子市立我孫子第三小学校	6
八千代市立勝田台南小学校	9
八街市立笹引小学校	11
富里市立日吉台小学校	13
いすみ市立東海小学校	15
富津市立天神山小学校	18

中学校

千葉市立打瀬中学校	20
千葉市立磯辺中学校	23
船橋市立芝山中学校	25
松戸市立新松戸南中学校	28
野田市立東部中学校	30
旭市立干潟中学校	32
茂原市立早野中学校	36
山武市立蓮沼中学校	39
富津市立大貫中学校	41
南房総市立富浦中学校	44

高等学校

専修大学松戸高等学校	47
千葉県立成田国際高等学校	49

特別支援学校

千葉県立桜が丘特別支援学校	52
---------------------	----

新聞に親しみ、社会的な見方・考え方を育てる

千葉市立大森小学校 山本 慧一・齋藤 直

1 はじめに

本校は、平成29～30年度の2年間、NIE推進の実践校として指定を受け、初年度の取組となる。社会科・生活科の学習を中心に、子どもたちの社会参画への態度と力の育成を目指して日々の教育活動を行っている。また、NIE教育の取組によって、新聞に親しみ、社会的な事象に興味・関心をもち、社会的な見方・考え方を育てたいと考えている。

子どもたちは、日々の生活の中で、テレビやインターネットなどの媒体で情報を集めている。しかし、自分の興味あるニュースや事象ばかりをインターネットで検索していると、知識のバランスが偏ってしまいがちになってしまう。そこで、新聞を通して学習を進めることによって、幅広い情報と予期せぬ出会いを体験することができるだろうと考えた。新聞記事は幅広いテーマのニュースに触れており、それを活用した学習を通して、新聞に親しみ、物事を多面的に捉える社会的な見方・考え方を育てたいと考えている。

また、低学年の子どもたちにとっては、活字を深く読み進めることは、実態として難しい面もあるので、新聞の写真や文字などを使った遊びや体験活動を通して、新聞に親しもうとする態度を育てたいと考えた。

平成29年度は、校務分掌の中にNIE主任を位置付け、各学年の代表者をNIE推進委員会として構成した。学年単位の実践を計画し、学年の実態に応じてNIEの実践を行った。新聞を活用した学習の進め方や、朝学習の時間での新聞に親しむ方法を研究した。

2 実践状況

(1) 環境整備(新聞コーナーの設置)

校内でNIE教育を実践するにあたって、全校児童がいつでも新聞を閲覧できるように、「新聞コーナー」を設けている。図書室の中に新聞閲覧台を置き、毎朝図書委員会の当番が数社の新聞を台に用意している。また、図書室の隣にある「お話の部屋」に過去の新聞を保管し、いつでも読むことができるようにしている。新聞を身近に感じられるように環境整備を行った結果、休み時間などに新聞を読む児童の姿が多く見られるようになった。

(2) 新聞を活用した学習活動

【特別支援学級】

新聞紙を身にまとい「ファッションショー」をして新聞に親しんだ後、「自分の名前の文字を見つけよう」「お気に入りの写真を紹介しよう」「知っている言葉を見つけよう」と活動を積み重ねた。はじめは漠然と新聞を眺めているだけだったが、写真を見て記事の内容に興味をもったり、知っている言葉を見つけようと意欲的に読もうとしたりするようになった。

【第2学年 図画工作科】



新聞を切ってつなげている様子

新聞紙は素材として非常に多様な性質をもっている。破る、ちぎる、折る、

丸める、切る、貼る、ちらかす、などの素材そのものと関わるような活動を低学年の子どもたちに

させたいと考えた。そこで、「切って つないで 新聞リレー」を行った。子どもたちは新聞紙を思い思いに切り、貼り合わせていくことで長さが体育館いっぱいになる様子に驚いていた。この学習活動を通して新聞に親しみをもつことができた。

【第4学年 国語科】

子どもの興味を引き出しそうな記事を選び、その記事に見出しを付ける学習活動を行った。千葉県内の鉄道に関する記事や、視覚障害者のためのボードゲームを作製した記事などを扱い、子どもたちが興味をもって読むことができる内容を厳選した。子どもたちは、短い言葉で要旨を的確に表現することのよさに気付き、新聞記事の内容を深く読み、自分で言葉を選んで見出しを考えることができた。

【第5学年 社会科】



新聞記事に気付いたことを貼る様子
ることが大切であり、情報の発信側・受信側の立場で責任ある行動の必要性を理解することをねらいとしている。

2016年の熊本地震でSNSの活用により、いち早く被災地に不足物資や救助が届いたことや、デマ情報で関係機関に多大な迷惑があったことを、新聞記事から読み取った。それをもとに、班ごとにSNSの長所・短所を分類・整理した。これにより、発信者の立場として責任ある行動が必要だと気付くことができた。今後も社会科の学習において、新聞記事を資料として扱うことにより、子どもたちが確かな事実認識を深めるととも

に、社会的事象を自分ごととして捉えさせたいと考えている。

【第6学年 国語科】

書くことの単元「意見文を書こう」の実践に新聞を活用した。新聞には、事実を発信する報道記事のほかに、事実を基に主張を交えて発信する社説やコラムがある。人の意見を読み深めることで、自分の考えを表現しようとする意識を高めたいと考えた。子どもたちは意見文の特徴をつかむとともに、興味・関心を刺激され、休み時間も意欲的に新聞を読む姿が見られた。そして、根拠をもって自分の考えを主張する文章を書くことができた。

3 まとめ

普段、新聞に触れない子どもたちに、校内に新聞を自由に読む環境を作ることで、新聞を身近に感じ、社会的事象に興味・関心をもつことができた。また、本年度は、教科の枠を超えて、新聞を活用する学習活動を多様に取り入れることができた。低学年や特別支援学級では、新聞を使った遊びや体験活動を取り入れた実践を行ったことで新聞そのものや、その記事や写真に親しむことができた。中・高学年では、新聞記事の内容をよく読み、社会的事象に興味・関心をもち、自分の考えに取り入れ表現することができた。また、新聞記事から一つの事象に対して、多様な意見があることを読み取り、身近な社会的事象をより理解することができた。

今後の課題として、関心ある社会的事象についての1分間スピーチなど自分の意見を発信する活動や、新聞記事の比較検討など多面的に物事を考えていく活動を継続して行い、新聞に親しむ態度を養い、社会的な見方・考え方を育てていきたい。

N I E の日常化育てる

市川市立大和田小学校 富永 加代子・鈴木 美菜・河野 太郎・
福馬 伸隆・流 雄希

1. はじめに

昨年度に引き続き今年度の重点課題として、「N I E の日常化」目指し、教室の一角にN I E 広場を設け、誰でも新聞の作品が見られるようにした。作品・新聞・はがき新聞用紙等を必要に応じて手に取れるので、活用の場が広がった。本校の高学年児童の家庭で新聞をとっているのは50%程度であり、この3年間では減少傾向にある。

市川市では4年生以上の各クラスに1部ずつ4紙の新聞が毎日届けられること、本実践校の特典として8紙が4か月間届けられることで、学校にいつでも自由に新聞を読める環境が整備されていることは大きな意味がある。新聞記事を家庭に持ち帰り家族で読み合い、話し合う機会を持つこと（ファミリーフォーカス）で家族を巻き込み、家庭学習としても効果を上げている。

日常的に新聞を使うだけでなく、自分や他者との関わりの中で新聞を活用し、そこから得た自分の考えを新たに発信することを目指して実践に取り組んだ。

2. 実践状況

< 回し読み新聞 >

回し読み新聞とは、自分の好きなテーマを決め、新聞記事を選び、4つ切りの画用紙に要約や自分の意見をまとめる。それを友だちと交換して読み合う活動である。わからないことは調べ、家族と一緒に読む。友だちと持ち寄った記事に対して感想を言ったり、自分の知っていることを交流させたりして考えを深めていく。更に廊下に掲示することで他の学級や学年の児童も目を通す。そ

の後の過程を帰りの会などで取り上げながら進めていく。



< 新聞で世界をのぞこう >

新聞で世界をのぞこうでは、まず、テーマを決めるために外国に関する自分の気になる国の記事を探す。次に、新聞記事を切り抜き画用紙に貼り、要約と感想を書く。そして、記事をより深く知るために、新聞や本、インターネットなどを活用して調べる活動を行う。最後に、調べたことを発表し、みんなで世界で今、起きていることを知る。



継続的に調べていくことで、つながりをもたせていく。

<教科学習への新聞の導入>

4年生「1つの花」では、戦争の実感のない子ども達に、戦後70年という特集をもとに記事を読んだり、スクラップをしたりした。読みの不十分なところは、家庭の協力を得て進めた。

5年生「大造じいさんとガン」では、2015年9月7日の新聞記事(「今こそ椋鳩十」)を活用して椋鳩十さんやその作品について知り、椋鳩十さんはどんな人なのか導入の段階で考えた。その記事を活用したことで大造じいさんの行動や情景の読解をより深めたり、広めたりして興味をもって取り組むことができた。また、新聞記事の見出しのつけ方を参考に自分のはがき新聞や大見出しを考えた。短冊に自分の書いた見出しを掲示し、この見出しは誰が書いたかクイズをして楽しみながら学習を進めた。

<新聞で新聞をつくろう>

1～5名のグループをつくり、自分たちが気になる・調べたいことをテーマにし、その新聞記事



を集める。30～100枚程度集めた新聞記事をもとにスクラップ新聞を作る。

手順は、以下の通りである。

【手順】



テーマを決める→記事を集める→レイアウトを決める→新聞記事の大事な箇所にラインを引く→要約・感想・編集後記などを書く→見出しを決めて書く→誤字・脱字がないか確認する



<各学年の取り組み>

1年生は、紙鉄砲、新聞に乗って遊ぶ、新聞を体につけて走る、新聞から自分の名前を見つける、顔を切り抜くなど

2年生は、新聞紙で遊ぼう(丸める、投げる、体につけて走る) 神経衰弱、文字さがし、詩の投稿など

3年生は、国語科の学習で、俳句を投稿しよう。算数科の学習で、三角形、四角形をつくろうなど

4年生は、国語科で『一つの花』の読みを助ける(戦争に関する記事) など

5年生は、朝の会等で、今日のニュースを紹介・情報ノート(NIEタイム) 国語科で『大造じいさんとがん』の読みを助ける(椋鳩十の記事) など

6年生は、回し読み新聞(NIEタイム) 世界のぞこう、投稿(意見文、将来の夢) 見出しの比較、出前授業(下級生に向けて)

国語『川とノリオ』の読みを助ける(戦争に関する記事) など

3. 結果

○新聞を活用することにより、今、世の中で起きている情勢について知り、世の中の出来事に対して興味・関心をもつようになった。

○『大造じいさんとがん』では、新聞記事を活用して導入したことで、作者やその作品の良さを捉えるのが早く、その後の学習のより深い理解につながった。

○「新聞で新聞をつくろう」では、大きな台紙に新聞記事の切り抜きを貼り、新聞から得た情報から自分が伝えたいことを効果的に表現して完成したことで達成感を味わうことができ、満足できた。

○「回し読み新聞」では、学級の友達・家族・他

学年の友だち・教師と意見を交流することで幅広い知識と周りの考え方を知り、自分の意見を深めることができた。

4. 考察

○新聞をタイムリーかつ臨機応変に教材として活用することで教科学習が活性化され、児童の生活を豊かにすることができる。

○指導者が組織的にかつ継続的に新聞教育に取り組み指導方法を学ぶ必要がある。思考力・判断力・表現力を高め、主権者教育の基礎を築いていく。

○教科のみならず、道徳や読書教育とNIEを関連づけさせることでより深く、より広く子ども達の力を伸ばすことができる。

○新聞には、たくさんの情報が載っているので、読み手の意識や視野によって多様な扱い方ができる。

5. まとめ

本校の児童は、楽しみながら新聞を活用して学習を行っている。特に、回し読み新聞や新聞で新聞をつくろうでは、新聞に親しみ友だち同士で互いに心を通わせて活動している。「新聞教育は人間教育である」また「新聞づくりは仲間づくりである」といつも感じている。

児童らに私達教員ができることは、新聞を様々な教科・領域で有効に活用していくことである。今後も各学年に一人設けているNIE担当者と協力して、児童の力を伸ばすための新聞活用を実践していきたい。

新聞を活用した授業づくり

我孫子市立我孫子第三小学校 人見俊次 柏原いずみ 桑澤淳 浅水美記
山口南 阿部剛志 前田陽 鈴木亮一

1 はじめに

本校では今年度より NIE 教育推進の指定を受け、高学年で NIE の実践を行った。5年生、6年生の教室前の廊下に新聞台を設置し、毎日係が新しい新聞を掲示することで日常的に新聞に触れさせると共に、授業での活用も行ってきた。各学年の実践内容を以下に紹介する。



↑新聞台に掲示された新聞を見ている児童

2 5年生の実践

(1) <マイ新聞を書こう！>

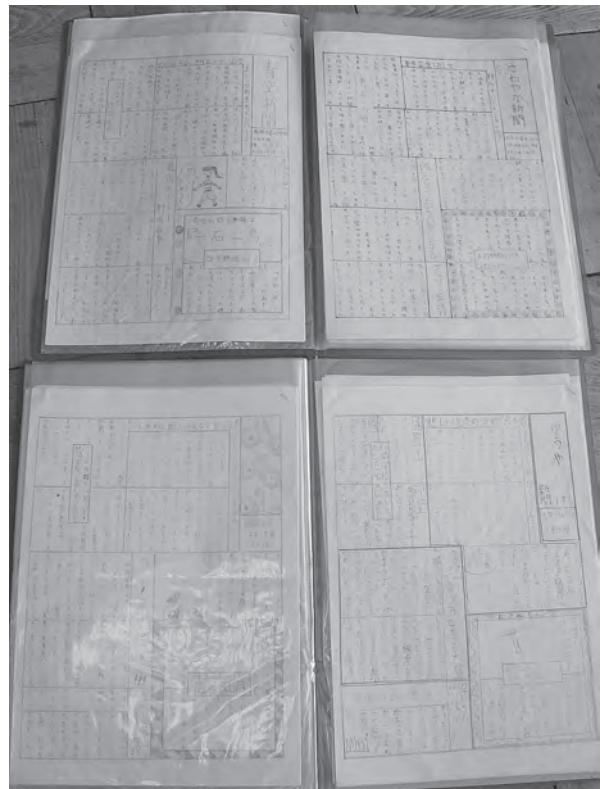
5年生は、まず、新聞の仕組みについて学ぶことから始めた。家庭で新聞を取っている児童は半数程度で、新聞になじみのない児童が多い。そこで、新聞にはどのような内容の記事があるのか、見出しの役割とは何か等を実際の新聞を見ながら学んだ。

次に、実際に自分たちが新聞を書くことを目指し、新聞の書き方を学んだ。これから一年間を通して「マイ新聞」を書き続けていくことを念頭に、新聞の題名やコラムの題材探しにも力を入れた。

そして、第1号は林間学校をテーマに書き上げ、その後第2号からは社会科の学習と関連づけ、学んだことを新聞にしてまとめるという活動

を行い、全部で5号を仕上げることができた。

この活動では、千葉日報社主催の第1回 CHIBA こども新聞コンクールに出品し、5年2組が佳作を受賞した。



↑5年生が作成したマイ新聞

(2) <「切り抜き新聞」を作ろう！>

新聞を書く活動と共に、5年生が取り組んだのが「切り抜き新聞」作りである。この活動では、まず、総合的な学習の時間に、「環境」に関する新聞記事を集めて、記事を読んだ感想や自分の考えを書きためていった。学習を進めるうちに、「環境」の中からさらに「自然災害」や「生き物」など、子ども達が自分の興味のある分野にテーマを絞っていった。同じテーマの児童同士で集めた記事を交流し合う活動も取り入れ、一人15から30の

記事を集めた。

その後、模造紙大の用紙に、集めた記事をさらに細かく分類して貼っていき、記事や分類ごとに意見や感想を書くという取り組みを行った。大見出しや小見出しも工夫した「切り抜き新聞」を作成することができた。

この活動では、東京新聞社主催の第15回新聞切り抜き作品コンクールに出品し、1名の児童が佳作を受賞した。



↑5年生 切り抜き新聞作成の様子

3 6年生の実践

<職業図鑑を作ろう！>

6年生は、キャリア教育と新聞を関連づけた取り組みを行った。キャリア教育では、実際に働いている方々に話をして頂く活動を取り入れた。

そして、新聞の中から「職業」に関する記事を集め、記事を読んだ感想や自分の考えを書きためていった。また、クラスごとに、毎週決まった曜日に新聞を読む時間を設けることで、たくさんの記事を読むことができるように工夫した。少しずつ子どもの中で、職業の知識が増え、職業に対する興味関心が増えていった。

最後には、職業をスポーツや政治、飲食業など、細かくジャンルごとに分類し、クラスで「職業図鑑」を作り上げた。そして、その「職業図鑑」を学年の廊下に置き、学年全体の図鑑を見て、意見や考えの交流ができるようにした。



↑6年生 新聞から記事を探している様子

4 まとめ(成果と課題)

(1) 成果

どちらの学年も、新聞を読むことで、テーマに関する記事を探したり、大きなテーマからさらにテーマを絞ったり分類したりする力がついた。

また、新聞記事から得た知識を他教科の学習にも生かすことができ、子どもたちの見方や考え方を広めたり深めたりすることができた。

5年生は、「マイ新聞」作りを繰り返し行うことで、新聞を書く活動に慣れ、新聞を素早く仕上げるできるようになった。「切り抜き新聞」作りでは、模造紙大の大きな紙に書くということで、最初は戸惑っている児童も見られたが、学習を進めるうちに、どの児童も夢中になり、仕上げたときの充実感や満足感が感想から感じられた。

6年生は、新聞記事を探して読み、自分の意見を書くという一連の流れを何度も繰り返したので、どの児童も見通しをもって計画的に活動に取り組むことができていた。児童によってはたくさんの記事を集めることで、友達と記事の共有ができていた。また、友達の選んだ記事と考えを読み合うことで、様々な職業に対する理解や、それぞれの考え方を知り、自分の考えを深めることができた。

(2) 課題

NIE 実践指定校としての新聞の購読スタイルに課題が見られた。前述したように、新聞を購読している家庭が少ない現状で、NIE の学習を充実させるためには、NIE 実践指定校としての新聞の割り当てを有効に活用することが不可欠である。

本校は、5年生も6年生も4クラス編成で、購読できる新聞は8紙を1部ずつ4ヶ月分とのことだったので、まず、5年生と6年生で4紙ずつ分けた。その後、5年生は、9月にA紙を4部ずつ、10月にはB紙を4部ずつというように9月から12月までの4ヶ月間の購読とした。6年生は、C紙を1組、D紙を2組というように決め、同じ新聞を1部ずつ9から12月まで4ヶ月間の購読とした。5年生は同じ物が4部ずつ届くため、各クラスに1部ずつ配り、学習に生かすことができた。

一方、2学期中に「切り抜き新聞」を作成するという目標があったため、9月から11月前半までは記事を集める活動を主に行っていたが、11月後半からは「切り抜き新聞」作成が主な活動となってしまったため、ほとんど新聞を活用できなかった。また、冬休み期間の購読も、もったいなかったと感じている。6年生は、各クラスで購読紙が決まってしまったので、様々な新聞に触れる機会をもつことができなかった。

来年度も、高学年で実践を行っていく予定である。今年度の反省を生かし、より充実したNIE教育ができるよう、新聞の購読時期を工夫し、活動内容もさらに深まるよう研究を重ねていきたい。

新聞に親しむために

八千代市立勝田台南小学校 久松 邦明

1 はじめに

本校は、平成29年度が、N I E実践校に指定された1年目である。子どもたちにとって新聞はなじみのないものである。テレビをつければニュース等の情報番組があるし、スマートフォンやパソコンでのインターネットでも、必要な情報は簡単に手に入る。わざわざ毎日新聞をとらなくても、メディアはいくらでも周りにあるのが、現在の状況だろう。必然的に、新聞に親しむことが少なくなってくるのが自然である。

しかしながら、新聞にだって良いところはたくさんある。持ち運ぶのは簡単だし、電気は必要ないので広げるだけでいつでも読むことができる。また、何度でも繰り返し読むことができるし、必要ならば切り取ってスクラップにまとめておくこともできる。だが、一番の利点は、知りたい情報以上のことを手に入れることができる、ということだと考える。辞書で言葉を調べる際に、隣の語句も一緒に調べることと同じように、新聞でも好きな欄だけ見るのではなく、ついでにほかの記事まで読むことができる。そうすることで、今まで興味をもっていなかった事柄に対して関心をもつことにつながることもある。

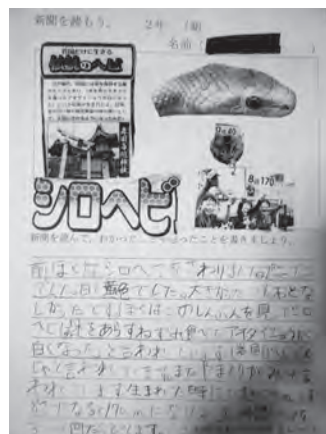
本校では、子どもたちにとってまず必要なのは、新聞に親しむことだと考え、全学年で国語科や社会科の学習を通じて新聞に関わる機会を設けた。以下はその実践内容の概略である。

2 実践内容

(1) 各学年の取り組み

①低学年

1年生は、国語科の学習の中で扱った。記事の中から、カタカナの言葉をさがして、ワークシー



トに書き写した。感想を書き、友達と紹介あった。また、2年生は、自分の興味のあることや、好きな事柄に関する記事や写真を新聞から

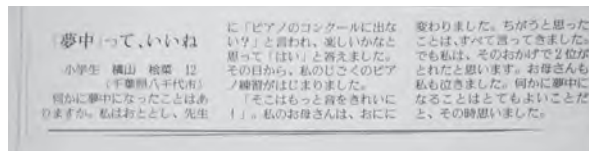
探した。わかったことと感想を書き、友達と紹介あった。(写真①)

②中学年

3年生は、国語科で学んだことを生かして、記事を簡条書きでまとめる練習をするとともに、感想を文章で書き、友達と話し合った。また、4年生は、国語科「ウミガメの命をつなぐ」で学習した「要約する力」を生かして、記事を要約する力をさらに伸ばした。

③6年生

6年生は、国語科「随筆を書こう」の学習を生かして「新聞に投書を投稿しよう」という学習を組んだ。毎週火曜日に掲載されるU-25に投書



した。2名の児童が掲載された。(写真②)

④5年生

5年生は、国語科「情報ノートをつくろう」の学習を生かして、情報を簡潔にまとめた。また、

興味のある記事に関して関連事項を調べ、さらに幅広い知識や関心につなげた。また、「言葉と事実」の学習では、同じ事実でも書き方によって、読み手が受ける印象が大きく変わることを学んだ。関連教材である「新聞を読もう」では、新聞の大まかな構成を学び、読み方を特徴を確認した。この2つの学習の中で、同じ事実であっても新聞会社によってどのようなことを中心に記事にするのか、読み手に伝えたいことは何か、というものが違うと改めて学んだ。



他の出来事に関してはどうなのだろうか、複数の会社の新聞を読み比べ、興味をもった記事を比較し、どのような印象をもつのか考えさせた。

(写真③)ある児童は、東京オリンピックのマスコットキャラクターの3候補についての記事に興味をもった。2社の新聞を読み比べ、マスコットの紹介の仕方に違いがあることに気がついた。どちらの方がわかりやすく書かれているか、自分の考えを書くことができた。

(2) 委員会での取り組み

①福祉掲示委員会では、NIEコーナーを設置した。毎月5、6年生が協力し、全校に対して、スポーツ関連や時事問題だけでなく、みんなに興味をもってほしい記事を紹介した。自分たちの感想を記入したり、低学年の児童でも興味をひかれるように工夫したりして掲示した。写真④



3 まとめ

新聞を活用することで、新聞に慣れ親しむことができたり、文章を要約してまとめる力がついたりすることができた。新聞を積極的に読んでいる児童も増え、朝の会で係が紹介する場面もあった。課題としては、各学年で様々な取り組みをしていて、学校としては一貫性がなかったことが挙げられる。より効果的な取り組みをするためにも、6年間を通しての計画を考える必要があると考える。今後はさらにNIEコーナーを充実させるなど、活動を推進していきたい。

新聞から“ことば”の世界を広げよう

八街市立笹引小学校 佐藤 一馬

1 はじめに

本校では、平成28年度よりNIE実践校の指定を受け、実践を積み重ねてきた。昨年度は、社会科授業における新聞の効果的な活用について模索してきた。その中で、新聞の『よさ』を活かす授業づくりが大切であることが明らかになった。日々の授業に積極的に新聞を取り入れることはもちろん、社会科資料としての価値も十分ふまえた活用こそが、児童の“深い学び”につながるのではと考える。

本年度は、国語科授業においても新聞の活用を図ることとした。新聞を通して、児童が“ことば”に親しみ、国語科の授業を通して“ことば”の世界を広げていく、そんな児童の姿をめざし、実践を積み重ねてきた。加えて、児童が日常的に新聞に親しめるように、図書室内に「NIEコーナー」を設置した。“ことば”の世界を広げられる環境づくりにも努めた。その日の朝刊5紙がいつでも見られるようにした。



NIEコーナー

2 実践概要

(1) 1年生国語科「わたしのなまえは？」

本校の1年生では、日頃から新聞に触れている

児童は皆無であった。新聞に初めて触れる児童が多くいたため、まず初めに新聞はどのようなものなのか、担任が児童に説明した。



「新聞ってこんなことが書いてあるよ」

1年生児童は、国語科の授業で平仮名の書き方を学習し、いろいろな平仮名に慣れ親しんできたところである。そのような児童の実態をふまえ、さらに平仮名に対して親しみがもてるように、自分の名前の平仮名の文字を新聞記事から探して、切り抜くという活動を行った。その中で、「同じ平仮名でもいろいろな大きさの字があるね。」「細かい字や太い字があっっておもしろい。」「この漢字は、お母さんの名前の漢字と同じだよ。」といくつもの児童の気づきが見られた。



「わたしの名前の平仮名、どこかな？」

どの児童も熱心に取り組むことができた。ま

た、友達と協力して、助け合って文字を探す姿も見られた。

1年生児童の実態から、まず新聞に親しみを持ち、「新聞っておもしろい。」と児童に思わせることが、今後における“ことば”の世界を広げる第一歩となると考え、実践した。

(2) 3年生国語科「漢字の世界を広げよう」

3年生では、これまで学習した漢字以外にも、新聞に書かれている漢字をできるだけ多く集め、漢字に親しむことを目的に授業を行った。まず、漢字の『へん』に着目させ、どんな『へん』があるのか、話し合った。次に、グループで協力し、『ごんべん』の漢字を新聞で探す活動を行った。どの児童も夢中になって取り組んだ。続けて、『きへん』『にんべん』の漢字探しにも挑戦した。多いグループでは、『ごんべん』だけで約30種類の漢字を切り抜くことができた。



『ごんべん』の漢字はどこかな？

3年生児童は、「こんな漢字もあるんだな。」「この漢字、何て読むのだろう。調べてみたい。」「これ、この前習った漢字だ。」など、新聞を活用した学習をきっかけに、漢字に対する興味・関心を高めることができた。

3 おわりに

本年度は、主に国語科において新聞の活用を図った。新聞は、“ことば”の宝庫である。児童

が、日頃から積極的に新聞と関わっていくためには、まず「新聞っておもしろい。」と新聞に対して親しみをもつことが大切である。そして、「新聞にはいろいろな漢字が使われているなあ。」「新聞には、どんなことが書いてあるのかな。」と興味をもたせることが新聞と積極的に関わっていく上での素地となる。やはり児童にとって“ことば”の世界を広げる上で新聞の活用が欠かせない。NIE実践校の指定を受け、新聞には教育における無限の可能性が備わっていることを改めて実感することができた。しかし、十分に留意しなければならないのは、新聞を活用すること自体が目的ではないということである。それぞれの教科・領域における『ねらい』をより効果的に達成させるものの一つとして新聞がある。このことをしっかりと念頭に置き、今後も日々の授業に新聞を活用していきたい。

新聞に興味・関心をもたせるための授業づくり

富里市立日吉台小学校 新井 潤一郎

1 はじめに

本校では、本年度から NIE 実践校として指定を受けた。本校の児童の実態を調査したところ、普段新聞を読む機会が少ないことが分かった。そこで、子どもたちが無理なく新聞に親しめるようにするための授業を展開しようと考えた。

2 実践状況

4年生の社会科「わたしたちの県『日本地図を広げて』」の単元を通して、授業実践をした。授業展開の流れは以下の通りである。

①学習課題をつかむ

②千葉県の形を調べる。

千葉県に対して親近感がもてるよう、千葉県の形を取り上げ、自由に連想する時間を設け、徐々に周辺の県や地形にも関心が向くように促した。



③方位を使って周辺の県を説明する。

- ・地図帳の上が北、下が南、右が東、左が西であること。
- ・千葉県の北に茨城県、北西に埼玉県、西に東京都が隣接していること。

④新聞紙の中から都道府県を探す。

- ・調べた都道府県名と記事の内容を書く。
- ・調べた都道府県を白地図に塗る。



⑤探した都道府県を発表する。

先に記事の内容を発表し、クイズ形式にした。



(授業後の児童の感想)

- ・新聞から多くの都道府県を探すことができて

楽しかった。

- ・都道府県だけでなく、新聞記事にも興味をもてるようになった。
- ・これから、政治や世界情勢、スポーツの内容も新聞記事から調べていきたい。
- ・5年生でも新聞記事を利用した授業に取り組んでみたい。

に学校環境もくふうしていきたい。

3 まとめ

1回だけの授業では47都道府県を見つけることができなかったが、早い児童で3回目の授業で全て見つけることができた。

ただ地図帳を調べて覚えるのではなく、児童は興味をもって新聞を広げ、意欲的に取り組むことができた。さらに、4年生なりに新聞を読むことで、今、日本の各地では何が起きているのかを知ることができた。

また、政治や国際情勢などについても新聞記事から調べていきたいという意欲をもてる児童が多くみられた。

4 平成30年度の取り組みに向けて

本年度は、児童が新聞に興味・関心をもてるような授業のくふうを目指して、取り組んできた。結果として、児童は新聞記事に興味・関心を高めることができた。

さて、平成30年度はNIE活動の2年目を迎える。本年度の新聞に興味・関心をもたせるという取り組みは継続しつつ、活動を通して思考力・判断力・表現力を高められるように研究を進めていきたいと考える。例えば、新聞記事を要約する活動、新聞記事から自分の意見を書いたり、発表したりする活動を充実させたい

また、授業だけでなく、新聞閲覧コーナーなどをつくり、児童が常日頃から新聞に親しめるよう

新聞を身近なものに

いすみ市立東海小学校 大高 純子

1 はじめに

本校では平成29年度にNIE教育推進の指定を受け、全校児童が新聞に親しむための素地づくりに取り組んだ。校内研究の主題を「よく考え、生き生きと表現する児童の育成」とし、児童が自分の考えを伝え合うために新聞を効果的に活用した実践を行った。児童の発達段階をふまえ、学年の実態に応じた実践を工夫した。平成30年度は、その取り組みをさらに充実させ、新聞を効果的に活用する授業づくりに重点を置いている。

2 実践内容

(1) 低学年における実践

1年生は、国語科の文字や言葉への関心を高める学習で実践した。既習のカタカナや漢字を見つける活動を通して、新聞に親しむようになった。新聞記事から学習した文字を見つけ、ワークシートに視写し、友達と確認し合った。児童が関心をもつことができるように、写真が付いている記事を選ぶなど工夫した。児童は既習の文字を進んで探すことができた。また、新聞記事と関わることがほとんどなかった1年生にとって新聞が身近なものと感じることができるようになった。



1年生の実践の様子

2年生も、新聞記事から既習の漢字や熟語を見

つける活動を行った。1年生よりも言葉の力を付けているので、見つけた漢字や熟語で文章を作った。既習漢字が増えることで、新聞記事の文章をだんだんと自分の力で読み進めることができるようになった。また、作った文章を友達と伝え合い、同じ言葉でも様々な文章を作ることができることに気付いたり、新聞記事を自分で読める達成感を味わったりできた。



2年生の実践の様子

(2) 中学年における実践

3年生は、文章を進んで読む力を付けるために、スクラップ帳を作ることを目的に、新聞記事を読む実践を行った。日本新聞協会が作成している「ハッピースクラップ帳」を活用した。自分が興味をもって記事を台紙に貼り、写真やシールで飾り付け、自分だけのスクラップ帳を作った。初めは気になった記事を貼るだけだったが、慣れたらコメントを入れるようにした。また、スクラップした記事を朝の会のスピーチで紹介した。無理なく取り組ませたことで児童はスクラップ帳を楽しく作ることができた。スクラップしたい記事を探すために、進んで新聞を読むことができるようになった。

4年生は身の回りのニュースに関心をもたせる



3年生の実践の様子

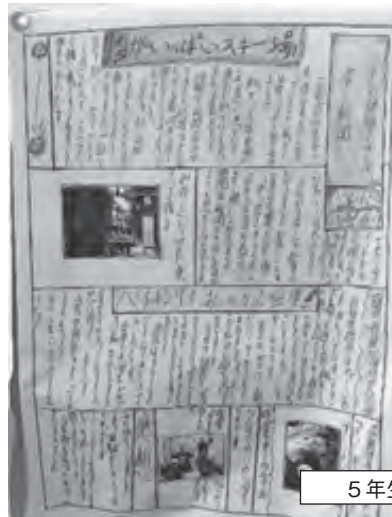
ために、新聞記事を読んで友達と交流する実践を行った。朝自習の時間を使って各社の新聞記事を読み、友達に紹介したい記事を探した。新聞をあまり読んだことのない児童が多く、新鮮な気持ちで新聞に触れる児童が多かった。ワークシートに新聞名、発行日、見出しを書き、友達に紹介するための文章を書いた。なぜこの記事を選んだのか、という理由も書かせることで、自分の考えをしっかりと持たせた。興味をもった記事を紹介して交流することで、新聞にはたくさんの情報があることに気付いたり、友達が興味あることについて知ったりできた。「新聞はおもしろい」という声も聞こえるようになった。



4年生の実践の様子

(3) 高学年における実践

5年生では、新聞のしくみを学習する実践を行った。「見出し・リード文・本文」といった構成を確認し、体験学習などについての新聞を書くことでさらに新聞のしくみの理解を深めた。写真の選択や見出しの言葉を工夫するなど、児童なり



5年生の実践の様子

に読み手を意識した内容を考えた。また、気になる記事を取り上げ、友達に紹介する活動を行った。相手と目的を意識させることで、分かりやすく伝えるにはどのような言葉を使ったらよいかを考えることができた。

6年生は、文章をじっくり読む力を付けるために、2学期に新聞記事の視写を行った。朝日新聞の天声人語や千葉日報の地域のニュースなどから、児童に身近なものを選んだ。スポーツ選手や地域の祭礼の記事などは関心が高く、進んで読んでいた。読ませてから視写をした。書くことでより内容の理解を深めることができた。また、新聞記事の見出しを伏せて印刷し、リード文や本文から見出しを予想させる実践を行った。児童は見出しを予想するために進んで文章を読み、見出しを考えることができた。文章の大事な部分を探して読む練習になった。3学期には、他校の児童と新



6年生の実践の様子

聞記事について意見を交流した。他校の児童から、新聞記事について意見を書いた文集が届き、その文章を読んで自分なりの考えを書いて返信した。AIや環境問題など、新しい社会の問題についても自分なりの意見をもつことができた。

3 まとめ(成果と課題)

本校の実態として、家庭で児童が新聞にふれる機会は非常に少ないことが年度当初の調査から分かった。そこで、まずは新聞とはどのようなものなのか、児童が興味関心を高めることができるような実践を考えていった。文字の量が多いことや難しい表現にぶつかることで、児童が新聞に対して苦手意識をもつことのないように、どの学年でも発達段階に応じて無理のない実践を行った。どの学年でも、児童は次第に新聞を読むことに慣れ、気になる記事を自分で読み進める児童も出てきた。新聞から様々な情報を得ることができること、身近な話題も多いことが分かり、新聞は役に立つという実感をもつ児童が増えた。また、6年生からは、新聞という紙媒体のよさについての意見も出た。インターネットやテレビのニュース番組と違い、いつでもどこでも読める、記事を並べて比べることができる、などのよさも挙げられた。

児童にとってなじみのなかった新聞であったが、実践を通して親しみをもち、役に立つものであるという実感をもたせることができた。

課題としては、新聞は本来大人向けに書かれているので、児童の実態に合わせた記事を探すことが難しいという点がある。また、授業のねらいに即した記事が必ずあるとは限らなかつたり、見つけるまでに手間や時間をかけなければならなかつたりという課題もある。さらに、新聞が児童数分確保できないときの工夫についても改善していく必要がある。

2年目の実践は、以上の課題をどのように克服していくかを考えつつ、児童がさらに新聞のよさを実感しながら、教科のねらいを達成していける授業実践を研究していきたい。

新聞記事を活用した国語授業の取り組み

富津市立天神山小学校 植田 正代

1 はじめに

本校では、国語科「自ら学び豊かに語り合う子の育成」を課題研究として取り組んでいる。その一環として新聞も授業に取り入れようと考え、N I Eに参加した。まず新聞を身近に感じ親しむために日常的な取り組みから始めた。また3年生と5年生が国語の授業で新聞記事の読み比べをした。

2 実践

(1) 新聞に親しむ

①廊下に置き、自由に見る。

- ・新聞に触れ、どんなことが載っているか調べた。ニュース以外にも広告や人生相談・コラムなどいろいろなことが載っていることを知った。
- ・朝の会でニュースを発表している学級では、新聞記事を読んでニュースを伝えていた。
- ・スポーツに興味のある高学年児童は試合結果を確認していた。

②新聞ノートを作る。

- ・3～6年生で取り組む。興味を持った記事を選び、わかったこと・考えたことなどをノートにまとめた。1か月に2回くらい行った
- ・宿題で出し親子で一緒にノートを作らせた時もあった。親子で新聞を読むよい機会になった。取っていない家庭もあるので学校にある新聞が役に立った。

③お気に入り新聞を作る。

- ・小グループに分かれ、スポーツ・トランプ大統領など気になったことを集め、テーマ新聞を作った。新聞を何回も読み自分たちのテ-

マにあった記事を切り抜き、コメントをつけた。

- ・実際の新聞記事を見て、レイアウトを参考にしていた。

(2) 新聞を使った授業を行う

①3年生「新聞記事をくらべよう」—上野動物園のパンダに関する記事を使って—

○単元の目標

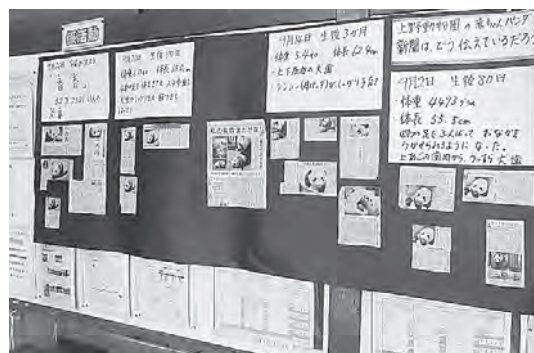
- ・同じ事実を扱った複数の新聞記事(記事の分量や写真・見出しの言葉など)を比べて読もうとしている。
- ・文章を読んで考えたことを発表し合い、一人ひとりの感じ方に違いのあることに気づくことができる

○本時の展開

- ・赤ちゃんパンダの名前が決まった記事2紙を比べ読みし、見出しが与える印象について考えることができる。

○成果と課題

- ・子供達は2紙の違い(写真・見出し・記事など)を意欲的に見つけていた。
- ・どちらの言葉の方がかわいい様子が表れているかなど思ったことを話し合えた。
- ・伝えたいことが違えば掲載する写真や見出し



の言葉が違うことがわかった。

- ・3年生なので記事と一緒に読んであげるなどしてもっと書いてある内容を理解させるべきだった。

②5年生「記者の思いを読み取ろう」—サッカーワールドカップ予選の結果を伝える新聞記事を使って—

○単元の目標

- ・新聞の編集の仕方や記事の書き方について関心を持ち、そこに書き手の工夫があることを感じながら必要な情報を集めようとする。
- ・新聞を読み比べ、見出しや本文など新聞の特長から書き手の意図を理解し、自分なりの考えを持ちながら読むことができる。

○本時の展開

- ・新聞記事を読み比べ、それぞれから受ける印象を出し合ったり、その理由を話し合ったりすることによって、新聞社によって読みだ手に伝えたい内容が異なることに気づくことができる。



○成果と課題

- ・複数の新聞を読み比べることで、新聞記事によって内容が違うことに気づくことができた。またその新聞がどんなことを読み手に伝えようとしているのか考えて読むことができた。
- ・サッカーについて関心の薄い子が多かった。取り上げる記事は子供達になじみのある内容

にすべきだった。

(3) 結果

- ・2学期長い期間にわたりいろいろな新聞が読めた。新聞を取っていない家庭もあるので、新聞について触れるよい機会だった。
- ・新聞は情報がたくさん詰まっていた学習に生かせることがわかった。
- ・国語授業で初めて新聞記事を使った。実践してみて成果と課題、特に課題がはっきりした。

(4) 考察

- ・新聞を使った国語授業で2学年が読み比べを行った。比べ読みは子供達が意欲的に取り組んだ。
- ・どんな記事を使うのか、どんなことを読み比べるのか、見出しをどのように扱えばよいのかなど課題が見えてきた。
- ・本校は課題研究と関連づけての取り組みなので、記事から「語り合う」場まで持つていくには、子供達の思いが持てるような授業をもっと工夫しなければならないことがわかった。

(5) まとめ

新聞は情報の宝庫である。インターネットとは違い、手元に置いて気になった記事を繰り返し読める利点がある。多くの新聞が読めてよかった。

国語の授業だけではなく、他教科にももっと生かしていきたい。

昨年度に明らかになった課題を全職員で共通理解して取り組んでいく。

コミュニケーション能力を育成するための NIE 教育

千葉市立打瀬中学校 石井 美佳

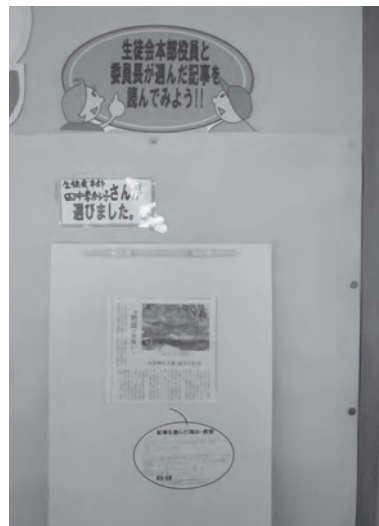
1. はじめに

本校の研究主題「豊かなコミュニケーション能力を身につけた生徒の育成～対話的な学びを通して～」の1年目にあたる。NIE 実践指定校として2年目になり、昨年に引き続き各教科において新聞を活用した授業を実践した。

2. 実践状況

(1) 新たな取組

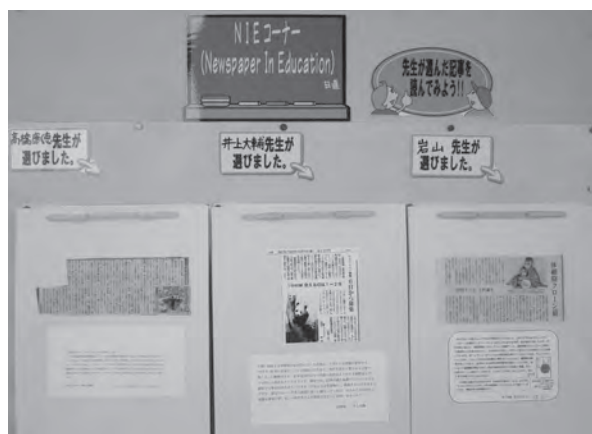
教科のオープンワークスペースに新聞を掲示するだけでなく、図書室、保健室、給食室、カウンセリಂಗールームなどにもそれらに関連した記事を掲示するようにした。今年度は、新たに2つの取組を行った。まず、職員の新聞を読む機会を増やすために、「先生が選んだ新聞記事コーナー」を職員室前に設けた。次に、生徒会活動に関する記事を生徒会本部や各委員長が選び、専門委員会専用の掲示板に掲示した。生徒が教師や生徒会活動を身近に感じられるように工夫した。



【生徒会本部や専門委員長が選んだ記事の掲示】



【1か月の新聞を日にちごとに棚に保管】



【教員が選んだ記事の掲示】



【英語科の新聞コーナー】



【理科の新聞コーナー】

(2) 授業実践

① 国語科

国語科では、3年生で、「朝日中高生新聞」の「天声人語で200字作文」を利用し、課題に合った作文を書けるようにした。「日野原重明さんの生き方に学び、自分はどのように年齢を重ねていきたいか」「幼い頃に受けた教育が現在の自分に与えている影響」といった課題についての作文を書いた。日野原さんの生き方を踏まえ、自分の生き方を考えるよい機会となった。また、幼い頃に受けた教育によって、今の自分があることを改めて考えられる機会となった。「天声人語」からより自分のことを深く考えられることを知ることで、新聞の面白さを味わうことができた。



【天声人語を使って作文を書いている場面】

2年生では、ディベート形式の話し合い活動を行った。市内でも珍しい私服の学校という点に着目して「学校に制服は必要か」という論題を設定

した。制服についての記事をいくつか紹介し、討論に深まりをもたせた。

② 社会科

社会科では、2年生で北海道地方の地域的特色の学習において、農業分野の学習を深めるために、TPPの記事を導入で紹介し、内容に深まりをもたせた。



【TPPに関する記事】

③ 理科

3年生の「遺伝」で、「優性・劣性」から「顕性・潜性」に改訂されることを紹介した。



④ 音楽

「身近な音楽」の教材として千葉県ゆかりの音楽の記事を扱った。

⑤ 保健体育

心肺蘇生法に関する記事を扱い、AEDを実習する授業の導入とした。



【AEDに関する記事】

2018年度は千葉市の研究指定校としてNIEの研究指定校で培った教材モデルを今後も生かし、発展させていきたい。

⑥ 英語

1年生の車いすバスケットボールの題材の導入において、千葉のプロ車いすバスケットボールの記事を紹介した。

3 まとめ

2年間NIE教育に携わり、さまざまな試みを行った。教科やその垣根を越えた活動を行うことで、自然に新聞を目にする環境を整えた。新聞は、事件・事故などを知るためだけのものではなく、言葉に出会う機会になったり、世の中の仕組みがわかるようになったり、生き方や考え方を見つめることができたりするためのツールであることがわかった。

新聞を活用した授業を通して生徒は以下のような感想をもった。「新聞は難しいものだと思っていたが、人の生き方や教訓を学ぶことができるものだと思った。自分の生き方を考え直す機会になった。新たな新聞の読み方を知ることができた。これからも生活に新聞を役立てていきたい。」

また、NIE教育に全教科で取り組む協力体制が確立できたことも大きな成果であった。新聞は学校教育のあらゆる教科や分野に対応することができることを証明できた。今年度からの研究主題の解明に向けた一助として新聞を活用することができた。

生徒が主体的に学び合う工夫 ～共感的人間関係を育成する活動を通して～

千葉市立磯辺中学校 湯田 智貴

1 はじめに

世界情勢の変動や技術革新による産業構造の変化などにより、今後どのような社会になっていくのかを予測することが、非常に難しくなっている。そんな中、次期学習指導要領によれば「対話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝え、他者の考えを理解し、自分の考えを広げ深めたり、集団としての考えを発展させたり、他者への思いやりを持って多様な人々と協働したりしていくことができること」とある。また、今日の情報化社会では、正しい情報を得て、正しく理解することも重要な力の1つになってくる。これらのことから、情報が入ってくるのを待つのではなく、自分で必要な情報を探し、そのことについて考えること、そして自分の考えを伝えていくことが大事であると考えられる。以上のことを踏まえ、本校では、じっくりと新聞と向き合うことで、主体的に物事を考え、他と議論し学び合うことができるようになることを目標にNIE活動に取り組んでいる。

2 実践内容

(1) 国語科の授業での活用

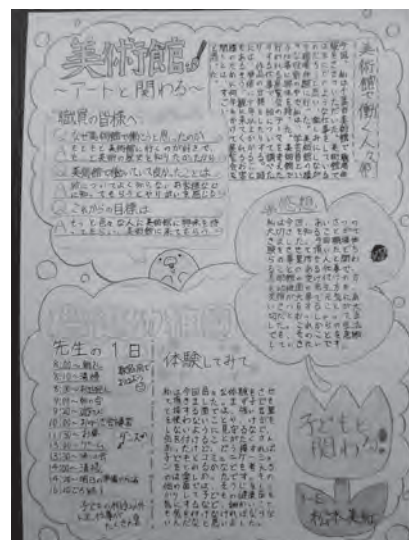
「インタビューをして記事を書こう」という課題を設定し、新聞を活用した。新聞ではどのようなことが書かれているのか、実際の記事を参考にした。また、現役の新聞記者の方に来ていただき、インタビューのコツなどを学んだり、保護者にインタビューを行ったりして、記事作成に取り組んだりした。

<インタビューしている様子>



さらに、学んだことを生かして、職場体験後の報告書を新聞形式で作成した。

<生徒が作成した報告書>



(2) 社会科の授業での活用

3年生の社会科の授業では、毎時間、順番に生徒が気になる新聞の記事について、自分の考えを述べ、気になることについて質問する時間を設けた。

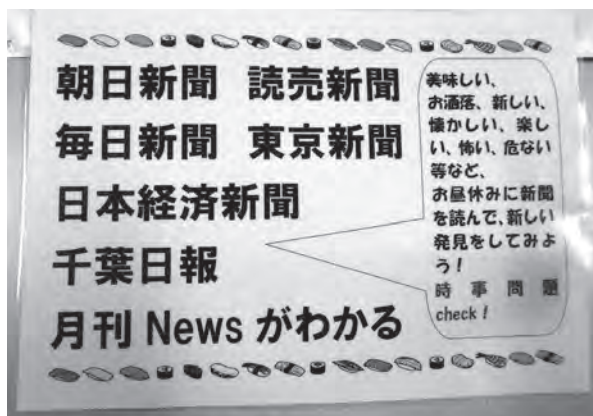
(3) 図書委員会での活用

図書委員会では、生徒が新聞をより身近に感じられるような掲示物の作成を行った。

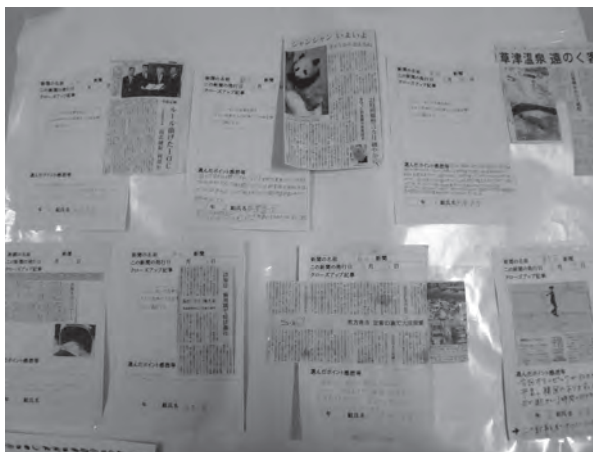
<新聞記事を読んでいる様子>



<新聞の面白さを伝える掲示物>



<関心のある記事を紹介する掲示物>



また、掲示物を作成するだけでなく、放送委員会と協力し、昼の放送で新聞記事を紹介する番組を制作してきた。

3 成果と課題

(1) 成果

教科や委員会の取り組みによって、生徒にとって新聞が身近になってきている。図書室で新聞を手にとってみようとする生徒が多く見られるようになった。また、昼の放送での新聞記事の紹介では、英語の記事にチャレンジしている生徒もいる。最初は、図書委員の生徒だけの活動だったが、徐々に他の生徒も興味を持ち、新聞記事をもとに自分の意見を伝えようと試みる生徒が増えてきた。

新聞を活用した様々な活動を行ったことで、「よく聴く」ことや「大切なことをまとめる」、「自分の考えを表現する」といった力が育まれている。また、社会の事象に目を向け、議論することで、一人一人が違った考えや価値観を持っていることに気づき、視野を広げることができた。

(2) 課題

今後は、実際の記事や資料を社会科の小テストなどに活用することや、英語科で英字新聞の読み取りをして表現方法を学ぶなど、日々活用できることを各教科領域でも取り組んでいきたい。そのような取組を通して、生徒が新聞に対する親しみを持ち、授業の発言や普段の会話などに生かされるようにしていきたい。そのためにも、新聞を生きた教材として、さらに発展した取組を行っていきたいと考えている。

「新聞を校内の活動に活かす」

船橋市立芝山中学校 駒野 和典

1 はじめに

NIEの研究を始めるにあたって、本校では、社会科教育で重視されている主権者教育とどう結びつけていくか、また、毎日配布されている新聞を学校現場でどう活かすか、そして船橋全体の新聞活用の向上にどう結びつけていくかの3点について考え取り組んできています。

そして、以下の5つの点を重視して進めています。

- (1) 主権者教育を重視し、生徒が社会問題に対し、自分の意見を持てるような場を作る。
- (2) 新聞を活用し、校内どこでも新聞が見られ、それが活かされている環境を作る。
- (3) 新聞を生かした授業を考え、実践していく。意見発表や討論を重視したものとする。
- (4) 社会だけでなく、道徳やその他多くの教科でNIE教育を展開し、実践を積み上げていく。
- (5) 新聞アンケートを市内各校で実施し集計し実態に合わせたNIE教育推進の提案をする。



2 実践状況

- (1) 社会科教科リーダーの昇降口係には、朝7時に来て、すぐ新聞を受け取りに行き、閲覧台の交換を行わせる。古い新聞は、職員室の段ボール箱に入れさせる。
- (2) 社会科教科リーダーに、朝、職員室前に来て、新聞を運び、各教室に3紙を開かせ、各担当場所の閲覧台について、8時10分までに同じく交換させる。
- (3) 社会科教科リーダーに、2時間目の後の休み時間までにNIEコーナーの曜日の所に記事を貼らせる。
- (4) 放送委員に、朝の放送で今日の一面記事の放送を必ず入れさせる。
- (5) 社会科教科リーダーに、図書室に新聞記事を貼らせる(随時2つくらい)図書委員には、それぞれに関連する本の紹介(司書)、置いて読めるようにさせる。
- (6) 生徒には、新聞は、帰りには切って持って帰って良いことにし、各自はテーマを決め、クリアファイルを持ち、ストックして自由に研究を深め、感想文なりを積み重ねていけるようにさせる。夏休みの自由研究などにしても良い。切って残った新聞は教科リーダーに片付けさせる。
- (7) いつも授業で全員が自分の意見を述べるのは無理なので、授業を工夫し、意見交換や討論ができる環境を作る。道徳において、新聞記事を題材とした授業研究を行った。
- (8) 道徳ガイドブックなどを利用し、「いじめ」、

「遵法精神」など扱い、新聞を利用した授業を多く行うよう働きかける。

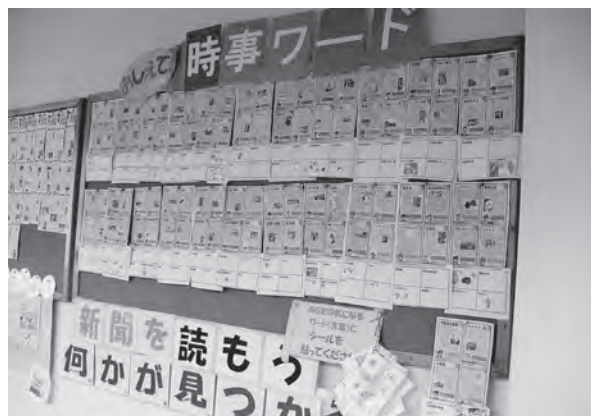
- (9) 総合的な学習の時間では、特にキャリア教育の部分で、人の生き方に関する特集をストックし、授業に生かしたり生徒に活用させたりする。特に、今年度は新聞記者も招請する予定。
- (10) 社会の授業では、多くの社会問題を取り上げ、意見を述べさせ、ストックさせる。
- (11) 社会では地理新聞、歴史新聞、公民新聞などそれぞれの特徴を生かした新聞作りを考え、校外学習では個性的な新聞作りに尽力し、新聞コンクールにつなげる。
- (12) 社会の授業では主権者教育を念頭に置き、新聞を使った授業を率先して行う。
- (13) 各紙を比較して見られるコーナーを作り、正しい判断ができる情報リテラシーの教育をする。



3 結果

生徒には、社会事象に対する関心に高まりを感じます。現状では、自分で朝、新聞を確認し授業などにおいて発表力の向上に結びついているし、朝の一面記事の放送や記事を見たことが話題になることもよくあります。記事を使った授業も社会だけでなく各教科、道徳、総合(進路など)にも使われ始めているし、今後多くの機会に新聞利用

の幅を広げていきたいと考えています。市内調査では、NIE教育が全体に周知され広がっているとはいえない状況がありました。今後本校から多くの提案が出来たらと考えているところです。



4 考察

「今日の新聞記事見た? どう思う?」そんな会話から始まる一日を積み重ね、将来的には、主権者として自分の意見が言えるようになるために、本校は昨年度からNIE教育に取り組み始めました。

前述のように、NIE委員となった社会教科リーダーの仕事は、毎朝、新聞を教室に持って行くことと、設置してある閲覧台の新聞を交換することから始まります。

閲覧台は、各学年の昇降口に設置され、生徒は、朝登校すると、まず一面記事を目の当たりにします。

その他にも閲覧台は、校舎内の七カ所にあり、新聞記事が自然と目に入るようになっています。一週間の一面記事を貼るNIEコーナー作りもNIE委員の仕事です。

また、図書館では、座ってじっくり読めるスペース作りや、写真にあるような、ニュース記事の関連本の紹介コーナーを設けていたりもします。

各紙を比較して見れるコーナーを作り、正しい判断ができる情報リテラシーの教育をすることも

必要と考えています。

授業では、今年度、道徳において、新聞記事を題材とした授業研究を行いました。来年度は、さらに広げて、どの授業にも関連づけていきたいと思っています。

5 まとめ

各学年とも校外学習以後の新聞作成の取り組みに工夫をもたせています。新聞コンクールに出せるような工夫した作品を作れるように指導方法も学んでいるところです。また、7月12日の自主公開研究会に向け、現在準備を進めているところです。内容は、地元にある「取掛西貝塚」の発見記事を利用した社会科の授業を行う予定です。今後はこの授業研究、自主公開に向けての

指導案検討や研究となる予定です。9月26日（水）には市教研大会（社会科で研究発表）も控えており、研究を深めていくつもりでいます。

「生き生きと主体的に学ぶ生徒の育成」

NIE活動を通して、大人になるための学校

松戸市立新松戸南中学校 石原 稔

1. はじめに

本校の研究主題「生き生きと主体的に学ぶ生徒の育成」～学習・生活習慣の確立を通して学力向上を目指す～と、設定して取り組んできた校内研究も今年で3年目となり、まとめの年となった。松戸市教育委員会の研究指定校としての「言語活用科(日本語分野)」の取り組みを続けつつ、他の内容についても研修を深めようと実践してきた。また、本校の生徒指導の視点『大人になるための学校』の使命を果たし実現することを念頭においた研究でもある。

「公」と「私」の区別を意識させる。『大人になるための学校』としての役割を果たすことが教職員共通の認識としてある。そこには、中学生という年代だからこそ、「公」と「私」の区別をつけることで、他者への思いやりを持ち、集団としての質を高めることを指導することが効果的であると考えからである。

また、NIEの授業として取り組むため、「思いを相手に伝えるための言語力の向上」「言葉が浮かんでも緊張してしまう時でも、臆せず話ができる力を付ける」「新聞を読む機会が少ないので、現実の社会情勢を知る」「新聞(漢字)を読む習慣づくり」などを目標として取り組んできた。

2 実施状況

NIEについては、複数社の新聞を使い、主に社会の授業で使用していた。主な取り組みは、メディアリテラシー学習である。社会の担当教諭が記事の内容と事件の扱い方を吟味したあとに、授業で数種類の新聞を見比べ、学習に活用して

いる。また、選挙時には選挙の流れや組閣後の写真を使用するなど生きた資料として学習に活かしている。



また、記事はどのような活字や色使いにすれば読者は理解しやすいのかなど、レイアウトの工夫についても触れている。

その他には、総合的な学習の時間や言語活用科の中で、あらゆる記事を使い、内容を理解し自分なりの考えを発表する授業をしていた。まず、意味の分からない語句の意味調べをして、自分の意見と感想を記入する。始めは、班内で発表し合い、その中から代表者を選出して全体の前で発表する。今後は、優秀な発展について、全校で学び合うための廊下掲示をするなど、全体で互いに学び合う場を設定していきたいと考えている。

本校生徒の学力の様子を分析すると、記述式問題に対して力を発揮した生徒が増えてきた。各教科の授業と連携して、特に言語活動を取り入れた表現力の向上を狙い、授業の取り組みを工夫している。NIEを活用した授業においては、自分の考えを記入する。まとめた事を堂々と発表する。と

言うサイクルに少しずつ慣れてきていると考え、記述式の問題に対して少しずつ成果が表れているとも考えられる。

3 まとめ

時間的に余裕が無いなかで教材研究の取り組みや、記事の内容を生徒の実態に合わせるため、事前にかかなりの時間を費やし、新聞の記事を扱う授業は少ない。また、自分の考えをまとめ、自分の言葉で発表することが苦手な生徒が多いのだが、やはり授業時数の少ない中行うため、時間がかからないなど、諸々の問題が多くある。



しかし、表現力向上を目指す学習内容として、本校の生徒に身に付けさせたいスキルである。

授業内容を工夫して、効率的にスキルアップをさせるため、より多くの生徒が積極的に発表出来るような取り組みを促したい。

新聞記事は、様々な視点から捉えれば、学習の糧となるものが豊富にある。生徒に読ませたい記事や情報への興味や関心の向上と、それを提供する職員の収集力と時間が必要だと感じた。

新聞記事を活用した「考え・表現する力」の育成

野田市立東部中学校 伊藤 圭哉

1 はじめに

野田市では平成26年度より土曜授業を行っている。本校では土曜授業の1時間を使って、新聞を活用したNIE学習を実施し、『読む・考える・表現する学習』を通し、『自己表現力の育成』に取り組んでいる。

平成28年度に2年間のNIE実践校の指定を受け、1年目を東部中NIE学習の『基本の年』として位置づけ、『新聞記事を読む。感想や意見を文章にする。発表する。』という学習形態を継続して実践してきた。そして2年目となる今年度は「工夫の年」として捉え、4つの新しい取り組みを行った。

2 実践内容

(1) 新聞記事の活用

①新聞スクラップ

新聞への馴染みの薄い1年生に、NIE学習の導入として全員に「中高生新聞」を配布し、興味のある記事を切り抜いて、見出しを付け感想を書くという、新聞スクラップ学習を行った。選択する記事、文章の構成やレイアウトなども取り決めを細かくせず、新聞に親しませることを目的に行った。

※下写真(新聞スクラップ作成中の様子)



②「一緒に読もう！新聞コンクール」の参加

新聞協会が主催する、「一緒に読もう！新聞コンクール」に全校で参加した。自分の家庭でとっている新聞や学校で自由閲覧できる新聞から記事を選択し、選んだ記事に対する考えをまとめた。そして、自分の考えを友人に伝え、更に友人の意見を聞くことで考えを深めていくことができた。

※下写真(記事を選ぶ様子)



※下写真(友人の意見を聞く様子)



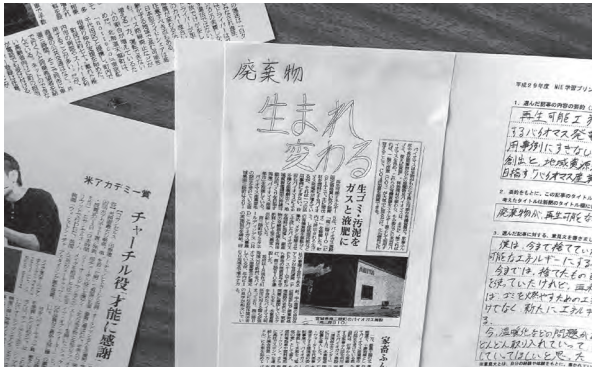
※下写真(意見を聞きまとめ上げる様子)



③新聞記事「見だし作り」

新聞記事の要約→自分の感想・意見の記入→他者との考えの共有という昨年度からのNIE学習の基本を継続して行った。また、今年度は記事の「見だし」伏せた状態で生徒に配布し、自ら見だしを考えさせる学習を行った。

※下写真(生徒が実際につけた見だし)



④テーマ毎の壁新聞を活用した討論会

一つのテーマで集めた新聞記事で構成された壁新聞を掲示し、その内容について学級や学年、全校で討論会を行った。日本や世界で実際に起こっている出来事を生徒全員で考える機会となった。

※下写真(校内に掲示された壁新聞)



※下写真(実際に壁新聞を活用した様子)



3 まとめ

- ・新聞スクラップによって、新聞に興味を持ち、自分の考えを文字にして表現するという、NIE学習の基本を身につけることができた。
- ・「一緒に読もう！新聞コンクール」に全校で参加したことで、生徒にとっては学年を超えて共通の話題をもつことになり、教師にとっては、全職員でNIEの学習指導を共通実践する場とすることができた。
- ・見だし作りをNIE学習に取り入れたことで、今まで以上に新聞記事をよく読み込み、考えを深める事ができた。また、実際の見だしを伏せ、自分の見だしとプロの見だしを比較することで、見だし作りへの意欲を高めることに繋がった。
- ・テーマ毎に様々な壁新聞を廊下掲示したことで、実際に社会で起こっている出来事を視覚的に知る機会を増やすことができた。
- ・全体を通して、初めは記事に対する感想を書くことで精一杯であった生徒も少なくなかったが、やがて感想だけでなく自分なりの根拠を明示した上で意見文を作成し発表することができるようになってきている。
- ・今後も新聞の活用の仕方を工夫し、こども達が世の中に興味を持ち、そしてこども達の自己表現力を伸ばせる学習になるよう取り組んでいきたい。

職員室から広がるN I E活動

旭市立千潟中学校 杉山 耕一郎

1 はじめに

本校は千葉県東部に位置する旭市の中学校である。全校生徒138名の小規模校で、保護者は農業に従事している者が多く、学校に協力的な風土である。学校教育目標は『主体的に生き生きと行動する生徒の育成～生徒一人一人が自ら考え判断して高度失せきるよう指導・支援に努める～』であり、その目標を具現化するための具体策の1つとして、N I E活動の充実が位置づけられている。平成29・30年度とN I E実践校の指定を受け、様々な取組を行っている。

2 実践内容

(1) 教職員から発信するN I E活動

本校は農村部ではあるが、新聞を家庭でとっていない生徒が学級の1割程度いる。また、教職員も20・30代の割合が増えてきており、家で新聞をとっておらず、インターネットで時事的なニュースをチェックしている教職員も少なくない。そこで、教職員自らが、新聞に親しむきっかけを作り、それを生徒たちに広げることはできないかと考え、1つ目の取組を行うこととした。

*新聞コンタールの活用



① 7時30分に学習図書委員の当番の生徒が昇降口前に全ての新聞の1面を掲示する。

【登校時に全生徒が1面を目にすることになる。

また、3年生は社会科の授業がある日には、自分が気になった1面の見出し・内容・記事に対する自分の意見をノートに書き留める活動を実施した。それらの活動によって、ニュースが身近になり、休み時間の生徒どうしの会話にも新聞記事についての話題が出るようになった。】

② 1時間目の休み時間に、学習図書委員の担当教師が、職員室に新聞を運び、空き時間の教職員が閲覧できるようにする。新聞の閲覧場所には付箋を置いておき、教職員が生徒に読んでほしい記事に自分の名前を書いた付箋を貼るようにした。付箋を貼る条件は、ア. 自分が担当する教科に関する記事※自分の担当する教科名を付箋に書くイ. 中学生に読んでほしい記事※〇〇先生のおすすめと付箋に書くとして、全教職員が1日1つ以上の記事に付箋をつけてもらえるように呼びかけをした。



③ 昼休みに学習図書委員の当番の生徒が第1多目的室(1週間の新聞を全て閲覧できるようにした新聞閲覧室。休み時間や昼休みに全校生徒が自由に閲覧できるようになっている。)に付箋がついた新聞を運び、閲覧しやすいように並べる。

ア.新聞コンクール応募のために活用(3年生)

月曜日の放課後学習の時間【帰りの会終了後30分】に3年生全員が第1多目的室に行って、取り組む。

- ・自分が興味を持った新聞記事を選ぶ。※自分の家でとっている新聞からでも、第1多目的室の新聞でも良い。
- ・記事を切り取り、印象に残ったところに線を引く。
- ・応募用紙に新聞記事を貼り、記事への感想や自分の意見を書く。
- ・月曜日の放課後学習の時間に終わらない生徒は、週末の宿題とする。
- ・週末に家族の意見を聞いて、その意見をまとめてくる。
- ・月曜日の朝に、各クラスの国語または社会科の教科係が回収し、担任に提出する。担任は確認した後、返却をする。
- ・その週の帰りの会で自分の意見を発表する。

※1日1名～2名

- ・良くまとめられている生徒のワークシートは第1多目的室に掲示。

【コーナー作成・ワークシート掲示

：各クラスの学習図書委員】

- ・1・2年生は3年生のワークシートを見て、定期的に印象に残った先輩に対する感想を用紙に記入する。

(2) 外部人材を活用したN I E活動

1・3年生を対象として、外部から講師を招き新聞についてのお話をいただいた。

3年生：読売新聞，1年生：朝日新聞

- ①3年生の講義9月21日(水) 5・6校時
(講義は13時15分～14時15分の1時間)

●講師：森昭雄千葉支局長

*講義内容：新聞ができるまで・新聞の見方・

活用の仕方など

◆生徒向け資料

●メモ帳(記者が使うメモ帳とほぼ同じサイズ)

●パンフレット「新聞を作ろう」

(A4判4ページ)

取材して記事にまとめる新聞作りの手順を説明した図解。

●パンフレット「スクラップをしよう」

(A4判4ページ)

気に入った新聞記事を切り抜き、スクラップ帳に貼り付けるコツを説明した図解。

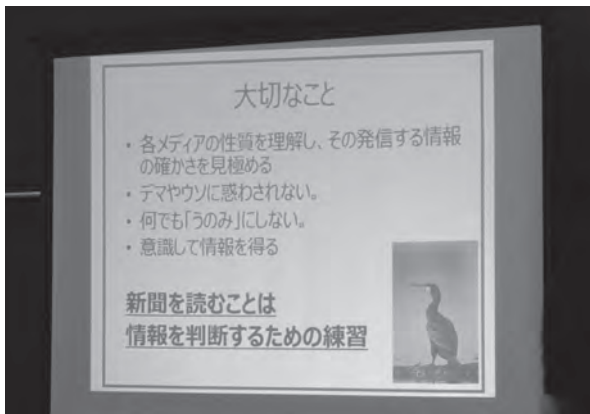


(3) 生徒相互に発信し合うN I E活動

*読売ワークシート通信を活用しての取組

※読売新聞などの記事の抜粋に、問題と解答記入欄がついたワークシート教材。

- ①毎週水曜日に8つの記事が配信される。
- ②各クラス学習図書委員の代表が集まり、配信された記事から、その週に全校で取り組む記事を決定する。
- ③各学年担当職員が決定した記事を、学年生徒人数分印刷し、金曜日の朝までに学年ロッカーに入れる。
- ④金曜日の7時50分までに各クラスの社会科の教科係が、職員室前ロッカーからワークシート教材を教室に持っていき、配布する。
- ⑤金曜日の朝読書の時間(7時55分～8時15分までの20分間)に取り組む。



- ⑥記事を読み取り、印象に残ったところに線を引き、問題に取り組む。
- ⑦記事への感想や自分の意見を、ワークシートの裏の空白のスペースに書く。※字数は学年ごとに決定。
- ⑧金曜日の朝読書の時間に終わらない生徒は、週末の宿題とする。
- ⑨月曜日の朝に、各クラスの社会科の教科係が回収し、担任に提出する。担任は確認した後、クラス代表を1名決定する。※残りの生徒のワークシートはN I Eファイルに綴じ込む。
- ⑩クラス代表の生徒は、水曜日の昼の放送で自分の意見を発表する。
- ⑪代表生徒のワークシートは第1多目的室に掲示する。

【コーナー作成・ワークシート掲示

：各クラスの学習図書委員】

3 結果

(1) について

まず教職員が、新聞を身近に感じるようになり、普段の教科や道徳の授業で新聞記事を活用する場面が増えた。教職員が新聞を身近に感じる事が、生徒が新聞を身近に感じるための第1歩になると感じた。また、普段新聞を読まない若手職員が積極的に新聞を読むようになった。

教科に関する記事やそれぞれの教職員が生徒に

読ませたい記事に付箋を貼って生徒に紹介することで、生徒が閲覧をするときにポイントを絞って新聞を読むことができるようになってきた。さらに、スクラップする新聞記事を選ぶ時に、「〇〇先生が紹介した記事だから、これにしよう。」とか、「〇〇の教科が好きだから、その教科に関する記事をにしよう。」などという理由付けをする生徒が増えてきて、職員と生徒が新聞を通してつながれるようになった。日常の業務が忙しくて、貴重な空き時間に新聞をゆったり読んでいる場合ではないという消極的な雰囲気が最初はあったが、生徒が先生方の付箋を参考にして記事選びをしていることを知って、生徒のために色々な新聞記事を紹介したいという思いを強めて、積極的に付箋を貼ってくれる教職員が増えた。

(2) について

実際に新聞作りに携わってくださっている新聞社の方にお話をいただいたことで、新聞の作り手側の思いや、記事をわかりやすく伝えようとしている新聞社の苦勞を知ることができた。その結果、より丁寧に新聞記事を読もうという姿勢が見られるようになった。また、見出しからその記事のポイントを読み取ろうという生徒も見られるようになった。

(3) について

毎週全校生徒が、1つの記事について意見を書き、各クラスの代表が昼にその意見を発表し合うことで、自分の視点との共通性や相違性に気づき、新聞記事を多角的・多面的に捉えることができる生徒が増えた。また、社会科のディベートや話し合い活動では、自分の意見を押し通そうとするのではなく、相手の意見にも耳を傾け、互いを認め合おうという姿勢が感じられるようになってきた。

4 まとめ

1年目は教職員が中心となって、N I E活動を行うことで、全校体制で取り組むことができたため、生徒と新聞の距離は大きく縮めることができた。そんな中で、生徒は新聞記事に対する思いを率直に表現することができるようになった。ただ、好き嫌いや～になってほしいなどの好みで意見が書かれているものも少なくなかったので、これまでの自分の既習事項に基づいた根拠を明確にした意見が表現できるように2年目はしていきたい。さらに、教職員がリードしてきた部分を、できるだけ生徒が中心となって取り組める活動を増やしていこうと考えている。

表現力を高める指導の工夫 –新聞の活用を通して–

茂原市立早野中学校 市原 剛志

1 はじめに

本校は、平成28、29年度の2年間、NIE推進の実践校として指定を受け、2年目の取り組みとなる。「主体的に学習に取り組み、豊かな表現力を育成する指導の工夫–学びを深める表現活動を取り入れた学習指導を通して–」を研究主題として、生徒の表現力の向上を目指して、日々の教育活動を行ってきた。

生徒たちは、素直で学習課題に前向きに取り組むが、自分の考えを積極的に仲間に発信し、豊かな表現で自分の考えを伝えることを、苦手とする生徒も多い。また、新聞のアンケートから、新聞を「ほぼ毎日読む」3%、「週に1～3回」2%、「月に1～3回」16%、「ほとんど、または全く読まない」74%と、新聞への関心は低い。全国学力・学習状況調査の結果分析からも、普段新聞を読む生徒ほど、テストの正答率が高いことも分かっている。

そこで、千葉県NIE協会のNIEアドバイザーを招いて、教職員の研修を行ったり、また、各教科・領域で、どんな新聞を活用した取り組みができるかを考える中で、次の2つに重点を置いて実践をした。

- ①新聞の閲覧コーナーの工夫を図り、生徒が新聞を閲覧する機会を増やすようにする。
- ②新聞への興味・関心を高める授業づくりを工夫し、自分の意見を書いたり、述べたりする学習を通して、読み取る力や、表現する力の向上を図るための授業づくりの工夫をする。

2 実践状況

(1) 新聞閲覧コーナーの設置

新聞に親しむために、各階の学年のフロアに新聞コーナーを設けた。「今日の一面 Watching!」として新聞4社の今日の一面トップ記事を毎日掲示し、一面記事の読み比べができるようにした。新聞のラックの取り替えは、学習委員会の活動として毎日行い、生徒たちが日常的に新聞を手にして自由に閲覧できるようにした。また、今日の一面の横に、「イチ押し! NEWS ペーパー」のコーナーを設け、学習委員のおすすめ記事や、「〇〇先生のイチ押し!」などの記事を掲示した。



(2) 読売ワークシート通信の活用

朝の読書の時間に、毎週一日だけ(金曜日)「新

聞タイム」を設け、読売ワークシート通信に取り組み活動を行った。読売ワークシート通信は、読売新聞などの記事の抜粋に、問題と解答記入欄がついたワークシート教材である。週1回メール送信され、最新の時事的な話を扱っており、手軽に活用できるところが魅力である。次の手順で取り組んだ。

- ①記事を読み取り、印象に残ったところに線を引き、問題に取り組む。
- ②記事への感想や自分の意見を書く。
- ③ワークシートは担任が確認した後に、生徒個人の総合ファイルに綴じたり、掲示したりして、お互いの意見を共有できるようにした。

読売ワークシート通信を活用することによって、読解力をつけることだけでなく、記事の内容をまとめたり、自分の意見や感想を書いたりすることができ、思考力や表現力を育成することにつながったのではないかと考える。身近でタイムリーな話題や、生徒が興味関心を持ちやすいものを選択しているが、道徳的な内容や、考えさせたい社会問題についても選択している。

(3)「スクラップ新聞」や「まわしよみ新聞」作り

保健体育科の授業では、リオデジャネイロオリンピックをテーマに、個人でのスクラップ新聞作りを行った。今年は4年に一度の「オリンピックイヤー」というチャンスであり、夏休み中に、リオ・オリンピックの新聞を集めさせておいた。そして、そこから、気になる記事、心に残った記事を切り抜きシートに貼り付け、スクラップ新聞を作った。新聞をとっていない生徒には、教師が集めたものから見つけさせた。気をつけさせたことは、

- ①新聞の日付・新聞社名を必ず明記すること
- ②記事を読んで気になる部分や注目する部分に、蛍光ペンで線を引く



- ③記事を選んだ理由や読んだ感想を文章で書くなどである。

リオでの熱い戦いが、たくさん報道され盛り上がっていたので、生徒たちの関心も高く、意欲的に取り組むことができた。

また、総合的な学習の時間に、グループで関心のある記事を選んで画用紙に貼り付ける「まわしよみ新聞」作りを実践した。4名ずつのグループに別れ、それぞれが選んだ記事について活発にディスカッションしながら、切り抜いた記事を、画用紙にレイアウトよく貼り付け、見出しや自分の意見、記事に対する感想や挿し絵を入れて、自分たちなりに「一面」を完成させた。初めての経験で、新聞を読み慣れていない生徒も多く、個人の切り抜く新聞を探すのに時間がかかってしまった。

このような「まわしよみ新聞」作りは、一人一人に発言の機会があり、短時間でも新聞活用を積み重ねれば、社会に目が向いていく。これからも

授業に取り入れることができ、教育現場の様々なシーンでの学びあいに活用できるのではないか。

最後に、グループごとの発表を行ったが、このプレゼンテーションは、これからまだまだ訓練していかなければならない課題である。生徒たちは「今まで新聞を読むことはほとんどなかったが、良い機会を与えてくれた。」と、楽しく活動する姿が見られた。新聞を読み、友達と交流し、意見を出し合いながら協力して作品を完成させる喜びを味わうことができたのではないか。



(4)「新聞を読んだの1分間スピーチ」の実践

- ・朝の会や帰りの会の短学活で新聞閲覧コーナーの新聞を読んだの感想や自分の考えを1分間にまとめて発表した。全員が学級内の輪番制で発表することができ、成果として自分の意見を人前で簡潔に発言できる生徒が増えた。3年生での入試の面接や自己表現試験などにおいても成果があった。

3 まとめ(成果と課題)

- ・学校生活のあらゆる場面で新聞を使った取り組みができ、多少なりとも、新聞が学校生活の中で身近になってきている。
- ・新聞閲覧コーナーを設置し、新聞を読む機会を設けたことで、新聞が身近な存在となり、休み時間に新聞を手にする生徒が徐々に増えた。
- ・読売ワークシート通信の活用や1分間スピーチの実践により、短い時間で文章の要点や必要な

情報を読み取り自分の意見を簡潔に表現できる生徒が増えてきた。

- ・「スクラップ新聞」や「まわしよみ新聞」作りなど、新聞を活用する授業を通して生徒は社会の出来事に目を向けることができた。様々な考えや価値観、さらにその背景を知ること、社会に対する関心を深めることができた。そして、自分の考えを言葉で表現し、伝え合い、他の人の考えを知るといった表現する楽しさを体感できたのではないか。
- ・新聞は情報の宝庫である。様々なことを学ぶことができる場である。新聞記事は、生徒たちの心にストレートに響く。そのねらいにあう記事を見つけるためにも、日頃から教師自身が楽しく新聞と接して考えていく必要がある。新聞は、まさにAL(アクティブ・ラーニング)の教材である。
- ・新聞活用を各教科・領域の年間計画の中に組み込み、計画的に実践していく必要がある。また、色々な教科で、新聞を活用しての授業の取り組みをしていきたい。

社会的事象に興味を持たせ、情報収集能力と活用能力の育成をめざす NIE 活動

山武市立蓮沼中学校 千田 賢弥

1 はじめに

本校は千葉県東部の九十九里浜に位置する全校 80 人の小規模校である。温暖な気候で風光明媚な自然に囲まれ、地域の方々に支えられている学校である。

本校の学校教育目標は「自ら学ぶ心豊かでたくましい生徒の育成」である。そして、この目標を達成するために確かな学力、豊かな心、健やかな体をバランス良く育成するように取り組んでいる。今年度の校内研究テーマは、「主体的に学ぶ姿勢と確かな学力の育成を目指した授業づくり」であり、教員の指導力向上に重点を置いた取り組みを推進している。

平成 29・30 年度 NIE 実践校としての指定を受け、全職員で実践を行った。テーマを「社会的事象に興味を持たせ、情報収集能力と活用能力の育成をめざす NIE 活動」として、年間 2 紙を使用し社会的事象に興味・関心を持たせる活動を中心に行った。



2 実践報告

(1) 新聞閲覧コーナー設置(通年)

社会的事象に興味・関心を持つことをねらいとして、新聞を自由に閲覧できるコーナーを視聴覚

室前の廊下に設置し、新聞の第一面が目にとまるようにしてある。また、夕刊のコラムも利用して、政治・経済だけでなく幅広い分野への興味・関心が高まるようにした。



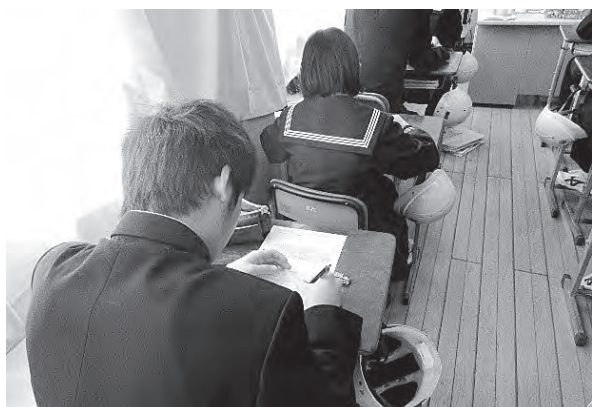
視聴覚室前廊下以外に、2階の踊り場にもコーナーを設け、NIE 担当が毎日記事を選び、生徒が閲覧できるようにしている。



(2) 新聞を使ったワーク(推進期間)

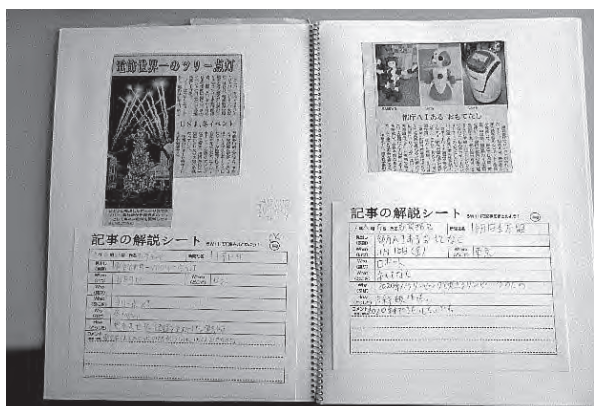
新聞記事を読んで思考力・表現力を向上させるために、担当職員の選んだ記事を生徒が読み、感想や意見を書き、職員が交替でコメントを入れる活動を実施した。担当職員は、毎日旬の記事を生徒に提示していた。全校生徒が同じ記事を読むことにより、活発なコミュニケーションが行われた。職員もワークプリントを見ることにより、今

までとは違う発見が見られた。



(3) 新聞記事のスクラップ(推進期間)

推進期間の10・11月に8紙を利用して、各クラス2名の担当者が、当日の新聞から記事を抜き出してスクラップする活動を行った。閲覧コーナーの時は2紙のみであったが、8紙の記事を比較することにより、各新聞社の主張の違いを見つけ、自らの意見としてまとめられるようになった。



(4) 授業での新聞活用

時事問題を取り上げ、社会的事象への興味・関心を持たせるために、社会科で新聞の第一面を題材にした小テストを毎週実施した。初めは興味・関心の低かった生徒が、徐々に興味・関心を示すようになり、時折自宅で新聞を見てくる生徒も出てきた。

3 まとめ

(1) 成果

NIE コーナーを設けたことで、新聞を読んだ

り、記事の話をしたりするなど新聞への興味・関心が高まってきている。さらに文章を読む力も高められたと感じている。

また全職員が参加することで、生徒だけでなく、職員も新聞を身近なものに感じられるようになった。それだけでなく、生徒にも教職員にも新聞を通して幅広い知識を得ることができ、視野を広げる良い機会となった。教師がコメントを書くことで、生徒との信頼関係も構築されてきた。

新聞は生きた教材と言えるので、今後も新聞を活用した活動や授業を行っていききたい。

(2) 課題

1年目の実践で、生徒の新聞への興味・関心は高められたと感じている。そこで、2年目は高まった興味・関心を生かして、思考力・判断力・表現力をさらに高める活動を行っていききたい。そのために1年目の活動を踏襲するだけでなく、工夫した活動も行っていかなければならないと感じている。

そこで次年度は、「平和の尊さやいのちの大切さに気づき、思いやりの気持ちを持って行動できる生徒の育成」を主題とした平和教育に取り組み、その一環として、視聴覚室前の廊下に戦争や国際紛争などの記事を貼り、平和について考えさせられるようにしていきたい。また次年度は平和をテーマにした切り抜き新聞も行い、この活動を通して、平和に関する記事を多く集め、平和の尊さを理解し思いやりを持って行動できる生徒を育てていきたい。

NIE 活動を通して、学校教育目標に到達できるように今年度も全職員で取り組んでいきたい。

NIEは「まずはやってみることから」

富津市立大貫中学校 山崎 康成

1 はじめに

本校は、房総半島富津岬の南部に位置し、美しい海と山など、豊かな自然に恵まれている。学区西部は東京湾に面した漁村地域、東部は鹿野山山系に接する農村地域、中央部はJR大貫駅を中心に商店・家屋が密集した地域である。学区の人々はふるさとの将来を担う子どもたちを育む教育に関心を寄せており、生徒を見守る姿は大変温かい。

本校の学校教育目標は「研志学んで聡く心豊かに体は逞しく」である。知徳体のすべての面で、いきいきと自分らしさを発揮し出来るようにという願いがある。その達成のための本校におけるNIE教育のねらいは以下のとおりである。

- (1) 生徒が新聞を閲読することで、社会への関心を高め、情報を読み解く力や自らの考えを表現する力を養う。
- (2) 他の生徒の考えに触れることで、共感的な人間関係を育てる。
- (3) 新聞を教育活動にいかに関活用するか、教職員の研修の一つとする。

指定初年度のため、まずは手軽に新聞を手に取り、興味を持つことが出来るような空間づくりを工夫し、生徒の活動、授業実践等により、生徒の新聞そのものへの興味・関心を高めたい、ひいては教師自身の自覚の醸成を図りたいと考えた。

2 実践状況

(1) 教師の研修

国語科の指導主事を務めた他校の先生を講師としてお招きし、研修を行った。

本校卒業生のプロ野球選手が掲載された新聞記事を中心に、読み比べの方法等を学んだ。読み比べは、各教科での活用はもちろん、道徳や総合でも扱うことができ、生徒達の観察力や様々な角度から話題を捉える目が養えること等の力が高まることのであった。

NIEに関して苦手意識を持っていた先生方にとっても良いきっかけになった様子だった。

(2) 生徒が新聞に親しめる環境づくり

生徒に新聞に親しんでもらうため、生徒の活動を取り入れた。級友が活動をしていることで少しでも興味を持ってもらおうとするのがねらいである。

毎朝、学習文化委員の生徒が昇降口と各階に設置した閲覧コーナーに新聞を並べ、どの生徒も気軽に新聞を手にとれるような環境を整えた。中には、生徒に勧められる複数社の記事を一緒に読み、その場での「ミニ読み比べ」を行う教師もあり、NIEの日常化につながった。

また、同委員が興味を持った記事を委員会だよりに掲載、紹介することで、新聞閲読意欲の喚起を図っている。

(3) 教師による新聞資料の掲示

生徒による新聞記事の紹介は、自らの経験や見聞で得た価値観や情報のみでの選定基準となるため、その興味の対象としかならない記事が多くなり、広がりや深まりに欠ける面もある。そこで、大人である教師から、生徒が興味を示し、視野を広げてほしい記事を題材にした掲示物を作成し



た。

木更津市在住の作家若竹さんが芥川賞を受賞した時に掲出した時には、文学作品に与えられる賞や読書への関心が高まっただけでなく、若竹さんの63歳での初作品に興味を示した生徒にはキャリア教育の一端としての指導ができた。また、題名の「おらおらでひとりいぐも」の意味を考えることで、自らが作文を書くときの題名にも工夫を施す生徒がいたりするなど、多岐に渡る活動の一助となった。



(4) 授業における新聞の活用

初年度で手探りの段階であるため、「一人一回NIEの授業を～習うより慣れよ～」を合い言葉に、まずは授業実践に取り組むことを目標とした。以下、いくつかの授業実践例である。

① A 教諭【道徳】

「箱根駅伝を走ったある選手は、国の指定する難病を患った。一時は走ることを諦めかけた

が、家族や周りの仲間に支えられて、競技を続けることができた」という記事である。

生徒の「自分なら競技を続けない(続ける)」という相反する意見を引き出すことで、仲間の意見を認め合うこと、諦めずに続けることの尊さ、健康であることのありがたさ等を考えることができた。

② B 教諭【数学】

スキー競技(ノルディック複合)で、前半のジャンプで得た点数と後半の距離のスタート時間の関係を一次関数の授業で取り入れた。

首位と28秒差でスタートしたが、1秒追いつけなかったことから

「ジャンプであと何メートル跳んでいけば」「距離であと何メートルあれば」追いつけたのかを計算させた。

具体的な内容を用いることで意欲が高まり、他の競技でも一次関数が使えないかを考える生徒が多くいた。細かい数字になってしまう(例:ジャンプの距離が105.5メートル)ため、計算間違いをしてしまう生徒もいた。

③ C 教諭【社会】

食品ロスと企業や自治体の対策についての記事を活用した。世界の貧困問題や食糧問題と先進国である日本の関係を理解させ、今後日本はどうすべきか、個人としてどう関わっていきたいのかを考えさせた。

説明に時間がかかったため、十分に考えさせられなかったが、生徒は切実感を持ち、自分に出来ることが何かを考えることが出来たようである。教科だけではなく、道徳的な要素もあるため、多くの先生方に取り組んでほしい記事であった。

④ D 教諭【国語】

新聞コラムを授業の始まりの10分間で視写

させた。目的は以下のとおりである。

- i : 限られた字数で必要なことを伝えるために精選された文言や表現を真似ることで、自らの語彙として身につけられる。
- ii : 10分間に書ける文字量を知れる。
- iii : 同じニュースも各新聞社によって異なるため、多角的な視点から一つのできごとを捉える習慣を身につけられる。

授業では、黙々と取り組み、視写を楽しみにしている生徒が多かった。

⑤ E 教諭【特別支援】

年間を通して、文字を丁寧に書くことや語彙の幅を広げることを目的として視写を取り入れた。前述の委員会だよりを活用することで、仲間が書いた記事を読むことにもつながった。手順は以下のとおりである。

- i : 家庭学習において新聞記事を丁寧に視写させる。
- ii : 間違えた漢字やひらがなは、更に翌日の家庭学習の課題とする。
- iii : 一通りしっかり書けたら、教師が作成したワークシートに取り組みさせる。

3 結果(成果と課題)

【成果】

- ・生徒の社会への関心が高まり、日常の会話の中に時事的な内容が話題に上るようになった。
- ・生徒指導の機能の一つである「共感的な人間関係」を形成する一助となった。
- ・教師が道徳の資料として扱うという観点で新聞記事を読むことで、問題(課題)意識を持って読めるようになった。

【課題】

- ・情報を読み解く力は、今後更に力をつけてい

く必要性を感じる。

- ・異動等で来年度新たなスタッフが増えたときに同質以上の取り組みが求められるので、研修を重ねる必要がある。

4 まとめ

授業等において新聞を活用する強みの一つは、それが最新の情報だということである。今の生徒達は、様々な取り組みに対して、その理由や根拠を知りたがる。しかし、新聞は「最近はこんなことが新聞に取り上げられているからみんなで読もう」という一言で、すんなりと受け入れられる。その話題に精通している生徒がいればスモールティーチャーとして協力を依頼できる。授業が終わったらその資料は掲示物ともなる。それにより、自ずと生徒達の新聞に対する興味も湧く。

「まずは教師がやってみることからスタートする」これが本年度の取り組みを通して感じた部分である。

来年度は指定2年目。今年度よりもさらに新聞でいっぱい学校にしたい。

新聞に触れ、興味を高めるための取り組み

南房総市立富浦中学校 小池 宏

1 はじめに

本校は、千葉県南部の南房総市にある中学校である。温暖な気候で風光明媚な自然に囲まれたこの学校では、6学級(特別支援学級2を含む)114名の生徒たちが学校生活を送っている。

本校の教育目標は「志を立てて文武両道に励み豊かな心を持った生徒の育成」である。そしてこの目標を達成するために、「確かな学力」「豊かな心」「たくましい心」をバランスよく育成することが求められている。また、「一人一人の生きる力の向上を目指した取り組みの工夫～『挑戦』と『信頼』をキーワードに～」という研究主題のもと、研修を重ねてきた。

本校は平成28・29年度とN I E実践校としての指定を受け、研修部を中心に全職員の協力のもと、実践を行ってきた。特に、生徒にアンケートをとったところ、家庭で新聞を読む生徒が少ないことがわかった。これより、新聞に『触れる』機会や場面を数多く設定することを今年度の目的として取り組んできた。

2 実践状況

(1) 地元新聞社記者による出前授業

本校では、修学旅行や校外学習などの学校行事のまとめや、職業や高等学校などを調べた際のまとめとして、新聞づくりに取り組んでいる。そこで、地元紙「房日新聞」の現役新聞記者の方に講師を依頼し、入学したての1年生を対象に、『新聞の作り方』の出前授業を行っていただいた。

実際の新聞を用いながら、記事やタイトルの書き方、写真の配置の仕方などを教えていただいた。



生徒は新聞を構成する際のルールを初めて知ることもあって、興味深く話を聞いていた。また、その後に行われた校外学習のまとめで作成した際には、新聞作成のルールをもとにして作成することができていた。

(2) 短学活でのニュース紹介

毎日の学活の時間の中に、新聞記事を紹介する時間を各学級で設けてもらった。各社の新聞を集めたコーナーを職員室前に設け、当番の生徒がその中から気になったり興味が湧いたりした記事を見つけた。

その後、予め要約しておいたものを学活の時間に発表をした。



生徒が選んだ記事は全国的に扱われているものだけでなく、地元のものを選ぶ生徒も多かった。

この実践を始めた頃は、記事の紹介が非常にぎこちない生徒が多かった。記事すべての文章をそのまま読み上げる生徒もいた。また、職員室前の新聞のコーナーでいつまでも紹介する記事を選んでいる生徒が少なくなく、記事の選択も不慣れであった。新聞に触れる機会が少ないことがこのことからわかる。

しかしながら、紹介の機会を重ねるごとに、紹介の仕方が上達した。記事のポイントが徐々に上手に捉えられるようになり、端的に紹介できるようになってきた。また、紹介する記事を選択する時間も短くなった。さらに、どのような記事が聞いている人たちの興味・関心をひくのかを考えながら記事を選択する生徒も増えてきた。

さらに、生徒が発表した記事をコピーしたものを学級内に掲示してもらい、誰でも読めるようにした。

(3) 教職員の注目記事コーナーの作成

生徒が選ぶ記事以外にも、新聞の中には生徒たちの視野や考え方を広げることができる記事がいくつもある。このような記事を教職員がを見つけ、掲示するコーナーを校長室・職員室前の廊下に作成した。

当番の先生に各社の新聞を読んでもらい、生徒たちに考えさせたい記事を掲示してもらった。また、これ以外にも、社会科の教諭が時事問題を丁



寧に解説するコーナーや、「地元の産業」や「スマートフォンの使い方」、「若者の思い」などの特集のコーナーも作られた。

記事を掲示すると、授業が終わって教室に戻る生徒が立ちどまって読むようになっていった。また、掲示が増える度に、掲示に注目する生徒が増え、記事を興味深く読むようになっていった。



3 まとめ

今年度はN I E実践2年目であった。2年間の取り組みを通して、生徒にとって身近にありながらも読んだことが少なかった新聞という存在を、より身近に感じさせることができたと思う。また、短学活のニュース紹介で紹介の仕方が上達していったように、表現力や要約する力を育むこともできた。

インターネットや携帯電話、スマートフォン、

タブレット等の普及により、自分の興味のあるニュースや情報は、気軽に手にすることができる。大変便利ではあるが、裏を返せば興味のないニュースや情報はなかなか手にすることができないということである。このままでは、視野や考え方が狭いまま生徒が大人になってしまう可能性が生じてしまう。これを防ぐために、多種多様な記事がある新聞を教育に用いることが非常に有効であると実感することができた。

2年間のN I E実践の終わりに、取り組みを振り返ってみると、生徒の意識はある程度は高められた。しかしながら、新聞の扱い方、用い方をもっと工夫すれば、生徒の意識をもっと高められたのではないかと反省している。来年度は実践が終わってしまうが、この反省を踏まえ、新聞を教育にうまく取り入れて活動していきたい。

表現力を身につけよう！～N I E活動 2年目の取り組み

専修大学松戸高等学校 山口 恵子

1 はじめに

専修大学松戸高等学校は、昨年度よりN I E実践指定校として活動をしている。2年目を迎えた今年度も、昨年度と同様に①世の中で起きている多くの社会問題に関心を持つこと、②多面的・多角的な視点から問題を考察すること、③他者との対話を通じて自分の意見を表現できる力を養うことを活動目標とし、主に公民科の授業で取り組んだ。

今年度は、特に自分の意見を表現する力の育成に重点を置くことにした。具体的には、高校3年生の一部生徒が、昨年度より取り組んでいる新聞ノートの作成の継続と、高校1年生の現代社会の授業の最初の時間に行う2分間スピーチの実施である。

2 実践内容と成果

(1) N I Eコーナーの設置

新聞を自由に閲覧できるようにするため、中央館と南館を結ぶ渡り廊下に「N I Eコーナー」を昨年度と同様に設置した。

生徒や先生方にも少しずつN I E活動の取り組みが認識されはじめ、1年目よりも廊下で新聞に目を通す生徒の姿を多く見ることができた。また、先生方からも新聞の活用について質問をされることが増え、一部の先生は、N I Eコーナーに設置した新聞を授業で活用していた様子だった。

(2) 長期休暇中のレポート作成

レポート作成の取り組みは、高校1年生の現代社会の授業の中で、約10年前から取り組んできた。

年3回の作成を義務付けているが、今年度は2回のみ(ゴールデンウィーク、夏期休業中)となった。

レポート作成にあたっては、自分が気になる記事を1つ選び(夏期休業中については3つ)、記事の要約と、記事に対する自分の考えを200字以上で述べるように指示をした。また、記事については、政治・経済・国際・社会問題に関する記事を選択させた。

(3) 新聞ノートの作成

新聞ノートの作成は、昨年度より実施した。今年度も高校3年生の一部生徒(専修大学コース：専修大学付属推薦制度を利用して専修大学へ進学を希望している生徒、S類型：スポーツ推薦クラス)を対象とし、年間を通して定期的に新聞に触れる機会を設けた。また、現代社会で発生している様々な問題に関心を持ってもらうとともに、その問題に対する自分の考えを、文章を作成することで表現することを継続して取り組んだ。

今年度は、生徒にプリントを配布し、そのプリントに以下の4つの項目をまとめるような形式にした。プリントの作成にあたり、齋藤孝『新聞力：できる人はこう読んでいる』(ちくまプリマー新書2016)を参考にした。

①この記事を選んだ理由

②記事の要約・記事が伝えようとしていることは何か

③記事を読んで疑問に思ったこと・調べてみたいと思ったこと

④記事に対する意見(200字以上)

昨年度の取り組みから改良したことは、記事を選んだ理由を付け加えたことである。生徒個人がどのような社会問題に興味・関心を持っているのかが、より鮮明にわかるようになった。ある生徒は、平和主義に関する内容を継続的に選び、その動向の変化をまとめていた。この作業を継続的に実施することで、生徒本人の問題に対する理解が深まっていく様子がうかがえた。

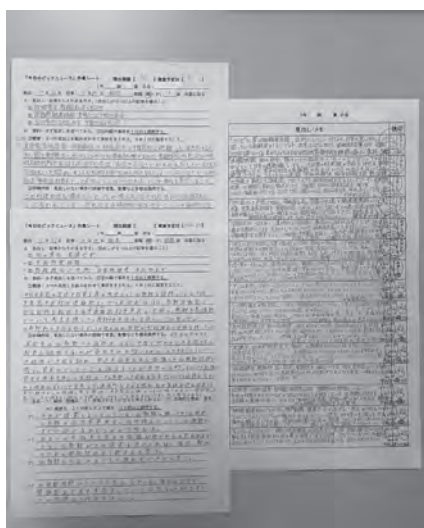
(4) 今日のビッグニュース

(2分間スピーチの取り組み)

今年度より、高校1年生の現代社会の時間の授業冒頭に「今日のビッグニュース」(2分間スピーチ)の時間を新たに設けることにした。X類型(専修大学松戸中学校からの内部進学者)の生徒たちが、中学3年生の公民の授業で取り組んできたことから、これを高校より本校に入学してきた生徒にも対象を広げることにした。

スピーチの実施にあたり、生徒の事前準備から発表までの流れは、以下の通りである。

①「今日のビッグニュース」作業シート作成



<作業シートに記入する内容>

- ・新聞の見出し
- ・記事の要約(5WIHに留意してまとめるよう

にする)

- ・記事に対する意見(意見をまとめる際に、疑問・問題点、将来の予測、具体的な意見や提案、感想を踏まえた上でまとめるようにする)

②作業シート作成終了後、担当教員まで提出し、チェックを受ける

③授業冒頭に2分間でスピーチを実施

スピーチを聞く生徒に対しては、「今日のビッグニュースメモシート」に、発表生徒のスピーチの内容をメモするようにさせた。

X類型の生徒は、スピーチへの取り組みが2年目になるということもあり、スムーズに取り組むことができた。高校より入学してきた生徒についても、全体的に良く取り組むことができた。同世代の友人たちが話す言葉に強い関心を持っている表れではないだろうか。

(なお、生徒たちが行ったスピーチの内容の一部を、時事問題として定期考査で出題するようにした。)

3 まとめ

昨年度よりNIE実践指定校として活動を行ってきた。初年度は、新聞を通じて世の中で発生している様々な社会問題に、生徒たちが目を向け、少しでも社会に対して興味を持って欲しいという思いで取り組んだ。

今年度は、昨年度の実践の継続が活動の中心となり、より深みのある活動に発展させることができなかったのではないかとというのが反省点である。しかし、少しずつ校内での活動が周知されていることを感じることもできた1年だった。

今年度でNIE実践指定校としての活動が終わるが、今後もできることを継続して取り組むことが大切であると考えている。この2年間で経験できたことを、今後の授業に活用していきたい。

新聞を開くところから

千葉県立成田国際高校 宮本 修

1 はじめに

本校は、昭和50年「成田西高等学校」としてに創立し、平成4年に「成田国際高校」と改称。平成18年に普通科、国際科の二科体制となり、英語教育及び国際教育の先進校へと成長してきた。平成27年には文部科学省から「スーパー・グローバル・ハイスクール」の指定を受け、広く国際的な視野や感覚を育む教育を推進している。

また、生徒も、国際高校の生徒としての自覚と誇りを持ち、勉学を始め様々な活動に積極的に取り組んでいる。

私自身は、長い間、生徒指導に重点を置く学校に席を置き、それを良しとしてきたため、本校のような進学を目指し自ら進んで勉学に励む生徒にどのように接して良いのか戸惑いを感じながら毎日を送っている教員である。

このため、流されるままにNIEの担当者となり、NIEの活動に対しても、その本来の趣旨からは大きく外れ、行き当たりばったりの取り組みに終始してしまった。

そんな教員が感じたところは、多くの生徒は、様々な活動に忙殺され、日頃からゆっくりと読書をする時間や新聞を読むという時間を持ってないということであり、そのため時事的な話題に疎く、小論文や面接の試験間近になってあわてて準備を始めているという実態である。

このような状況で、私ができることとして、自分が担当する国際科の三年生『政治・経済』の授業において、わずかな時間でも新聞に向き合う時間を持ってもらえればと思い活動を始めた。

授業で新聞を読む時間を設定すると伝えたところ、

数名ではあったが、申し訳なさそうに家庭で新聞を購読していないためどうしたらよいのかと相談に来た。新聞は毎日学校に配達されるものを使うので心配はிரらない旨を伝え安心させた。

以前勤務していた学校では、新聞を購読していない家庭の比率は高く、その理由を単純に貧困に求めていたが、本校においても、その正確な理由はわからないが、毎日新聞を開くという習慣を持たない家庭があるという現実を知らされた。

活動として記事のスクラップなどを考えていたが、1人でも自分の新聞を持たない生徒が存在する以上、新聞は共有することとした。

2 実践状況と結果

①新聞を並べるところから

誰でも自由な時間に新聞を閲覧できるよう、また、家にも持ち帰れるように(原則返却) 社会科教室前廊下に各紙を並べて置くことにした。

私は、新聞が並んでいることを宣伝することもなかったが、やがて、普通科の生徒にも新聞各紙が並んでいるという情報が伝わり、彼らも新聞を持ち帰るようになっていった。

やがて、普通科・国際化の生徒を問わず、「○月○日の○○新聞を借りていきます。」という申し出があるようになり、生徒にその意図を確認すると、○○事件についての記事について事前に新聞社のサイトで検索してきたという。

私も、この生徒たちと同様な方法で時事問題について調べ、わかったようなふりをして生徒に語ってきた。

生徒がすでに到達していることに対して、偉そ

うに語る私の姿は傍から見ればまるで喜劇役者ではないかと思わせた出来事であり、教員の役割の大きな変化を実感した瞬間であった。

②新聞を開いてみよう。

『政経』の授業での取り組みであるため他の項目を無視するわけにはいかないので、授業時間の最初の15分程度を新聞に目を通す時間に当てようと考えたが、現実には新聞を開かせてみると、多くの生徒は新聞を熟読しており15分で時間を切り上げることができなくなってしまった。

そのため、2単位分の1授業時間分を新聞を読む時間に充て、ただ自分の好きな新聞を広げ、各々好きな記事を読み、好きなメンバーと自由に語り合ってもらったことにした。

また、グループワーク型の授業に慣れた本校生徒は、3年生ともなるとグループが示す表層的関係性に嫌気を示す生徒もおり、あえて何も指示を出さない時間とした。

これは、生徒がどのような問題に関心を抱き、どのようにその問題を友人と共有していくかの過程を見ることができたため大変有意義な時間となった。

一人で1時間新聞を熟読する者、社会的事件を語るグループ、新聞の構成を語るグループ、広告について語るグループ、当然のことながらスポーツ面で盛り上がるグループもあった。



③面接・小論文対策を超えて

上記の自由な活動を3授業時間分行った後、生徒自身が興味を持ったあるいは疑問を持った記事に関して概要を記しそれに対してコメントを書いてももらうことにした。

しかし、これも始めてみると、新聞に関することなら何でも良くなってしまい、漫画、諷刺画、人物欄、広告、テレビ欄、果ては天気予報まで新聞に関するすべてが批評の対象になってしまった。

自由な時間を楽しみにしていた生徒からは、なぜコメント提出しなければならないのかという疑問が出されたが、次のような目標を伝え納得してもらった。

目先の利益としては、時事問題を知り書くことによって小論文や面接の対策となること。しかし、それを超えて、様々な個性を持った君達が、それぞれ興味、関心を持った所から社会という大海を見詰め、今まで獲得した知識を活用し、君達なりの世界観や人生観を深めていってもらいたいこと。そして、その世界観や人生観を友人とのコミュニケーションを通して修正し、より質の高いものへと発展させていってほしいこと。だから自分を高めていくためには、自分の考えを相手に伝える力が必要になり、同時にその力は相手の考えを正しく理解する力でもあるので、自分の思いを客観化するために文章化していく訓練は必要であるの

だと伝えた。

この活動を5授業時間分行ったが、この時期が私大の公募推薦の時期とも重なったため本来の趣旨がどこまで理解されたかわからないが、生徒の真剣な姿を見ることができた。

3 まとめ

ともかくも何をどう進めたらよいかかわからないままの初年度の取り組みであったが、生徒の真面目さに支えられてどうにか終わることができた。

生徒の授業に対する真面目さを支えているものは、「もっと知りたい」「もっとわかりたい」という知的好奇心である。

私は、今まで、知識を教える＝伝えることを教師の最大の使命のように考えていた。そのため授業はまず静かに座っていることを絶対命題としてきた。

しかし、N I Eの取り組みにあたっては、生徒の知的好奇心を信じることから始めてみようと思いい、先にも記したが「何も指示を出さない授業」から始めた。

指示のない授業に対しては、何人かの生徒は批判的ではあったが、多くの生徒は、新聞それ自体に触れられたことに満足感を示していた。

ここから、生徒の活動をただ漫然と見守るのではなく、生徒の知的好奇心を導く何らかのリーダーシップが必要であることがわかったが、次年度具体的にどのような取り組みを行うべきかについてはまだ見えていない。

ただ、N I Eの取り組みを通して、生徒たちが、もっと幅広い世界観と人生観を形成し発展させていってくれたらと願っている。

肢体不自由教育特別支援学校の新聞活用

千葉県立桜が丘特別支援学校 石川 美雪

1 はじめに

千葉県立桜が丘特別支援学校は肢体不自由教育を行っている特別支援学校であり、昭和36年に創設された学校である。

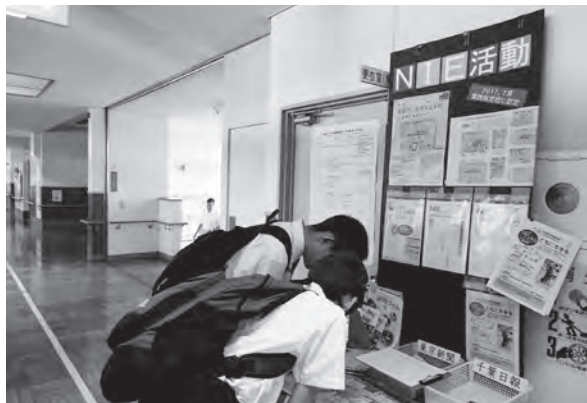
今年度から、NIE実践推進校に指定され、新聞活用に努めてきた。今年度は、①NIE活動コーナーの設置②各学部・各教科での新聞活用③職員向けの研修会の実施を掲げ、取り組みを始めた。学校全体でNIEに興味関心をもち、学校全体で活用に繋げていきたいと考えた。

2 実践状況

(1) NIE活動コーナーの設置

職員室前にNIEコーナーを設置し、新聞を各社ごとにケースに入れ、生徒・職員がいつでも新聞を手に取り情報を得やすいようにした。肢体不自由のある児童生徒は車椅子を使用していることが多いため廊下にNIEコーナーを設置すると移動の妨げになるため、比較的児童生徒の移動の少ない職員室前に設置した。

新聞記事のスクラップを使った独自の週刊ニュースを発行して新聞記事に興味関心をもてるように工夫した。提供された全ての新聞社の新聞を使用し、



一週間のダイジェスト版的な内容にした。

また、NIE活動に関する各種研修会の案内や書籍なども置き、NIEに関する情報がこのコーナーに来ると得られるに工夫した。

(2) 各教科における活用

授業で新聞を継続的に活用したい者を全校に呼びかけて参加を促した。参加申し込みのあった教科担当者には活用したい新聞を優先的に手元に届けるようにした。



高等部では現代社会の科目で選挙に関する授業をはじめとして継続的に新聞を活用するようにした。また、1年から3年までの地歴公民を履修している生徒に平和に関する毎日新聞社による出前授業を実施した。

情報処理の科目を履修している生徒は、工業系の新聞を活用し、情報に関する最新情報を得られるようにした。

本校は寄宿舎を併設した特別支援学校である。夕刊は寄宿舎に届け、舎生が誰でも読むことができるようにした。

当日以外の新聞もストックし、いつでも誰でも活用できるようにしたり、臨時発行の子ども新聞を小学部でも活用するようしたりした。

(3) 職員向けの研修会の実施

夏季研修の一環として、職員向けに新聞社の記者による人権教育に関する研修会を実施し、新聞のもつ力についての講演をしてもらった。



3 結果

(1) N I E活動コーナーの設置

S H R後にN I E活動コーナーに立ち寄り、新聞を読んだり、選んだりしている生徒や定期的にご利用している生徒がいた。おおよそニュースなどで社会の重大ニュースを知っているためか、そのニュースに関連した記事を探していることが多かった。時には「おすすめの記事」や「比較検討したいのでどの新聞が良いのか」などのアドバイスを求められることもあった。加えて、新聞の良さを尋ねると、「ピンポイントに物事を調べるのにはパソコンが良いが、幅広く知るには新聞の方が面白い」と答えるなど、新聞への関心が徐々に高まってきていることを感じる事ができた。

職員室前に設置したことで、継続活用の職員だけでなく、他の職員も新聞を手にし、記事を読む姿を多く見かけた。今は若い職員でも新聞を読まなくなっているので、良い機会に恵まれたと思っている。ただし、生徒にとっては職員室は遠いため、誰にでも気軽に利用しやすい場所とは言えないため、車椅子の生徒の移動の妨げにならず、利用しやすいN I Eコーナーの設置場所の検討が必

要である。

毎週月曜日に、新聞のスクラップに週刊ニュースを発行することができた。新しい週刊ニュースが発行されたことがすぐに分かるようにスクラップを貼る台紙の色を変えた。時には記事に関するコメントなども加えた新聞にした。発行当初の1、2号は、職員向けに新聞活用の仕方なども加えた週刊ニュースにしたが、それ以降は生徒向けの週刊ニュースにし、生徒自身が読んだ後に「何か」を考えられるような構成内容にし、新聞に対する興味関心がもてる内容で発行することができた。

臨時的にテーマを設け、「総選挙を考える」「平和について～核兵器について～」などのテーマ性のある週刊ニュースにした。週刊ニュースから社会的事象の振り返り、そこから自分なりにどう考えるのか、自分の意見を自分なりに考えて欲しいと願った。職員からも読んだ感想などを寄せられることが多かった。新聞活用の初年度の取り組みとして生徒と職員向けに効果的な取り組みだと思われる。また、発行し続けた週刊ニュースは、年度末に昇降口の左右の掲示板に、「新聞で振り返る～2017年9月～」と題して掲示した。生徒や職員、保護者の全ての方に見てもらい、好評を得ることができた。



(2) 各教科における活用

高等部では、現代社会の科目で新聞を活用した

授業を展開した。18歳選挙権を学習している時期と衆議院選挙が重なり、立候補者について調べたり、国政について考えるきっかけになった。新聞を購読している家庭が減っている中、新聞を毎回読むことは新鮮に映ったようである。出前授業では、テーマを「平和」とし、生徒自身が平和からイメージするものや平和に対する考えをアンケートでとり、生徒が学びたいことを主軸とした出前授業を実施することができた。

(3) 職員向けの研修会の実施

「アフリカから学ぶ特別支援教育の視点」と題して毎日新聞社でかつてアフリカで特派員として活躍していた方による人権教育の研修会を行った。アフリカでの特派員であったときの様々な出来事取材した当時の様子から振り返り、平成28年4月1日から施行された障害者差別解消法による共生社会の実現に向け、障害とは何か、インクルーシブ教育とは何かを考えさせられる内容の研修会を実施することができた。直接的な新聞活用の方法というよりは、教育現場で新聞を活用することの意味を問う内容(理念)になっており、研修会後の職員のアンケートにも「これまでの教育現場では聞くことができない違った視点で特別支援教育を考えることができた」という内容が圧倒的に多かった。特派員経験のある方の講話には説得力があり、新聞のもつ力に改めて気づかされた。まさにこれこそが新聞の魅力なのだろう。

4 まとめ

今年度NIE活動では、①NIE活動コーナーの設置②各学部・各教科での新聞活用③職員向けの研修会の実施を掲げ、取り組みを始め、全ての項目に於いて計画通りに実践することができた。全校で新聞活用を推進していくためには2つの課題があるように思われた。

1つ目の課題として、実践担当者だけが実践をするのではなく、新聞協会から提供されている宝の山である「新聞」をいかに多くの先生方が活用できるようにしていくかが課題として挙げられる。そのためには、職員研修として新聞スクラップでスクラップ新聞を作成するなどの研修をすることで改善されていくのではないかと感じている。先生方の実践力がつくだけでなく、新聞がもつ新聞の魅力にも気づくことができると思う。自ずとそれぞれの先生方なりの実践が生まれてくると思う。職員研修でも任意の研修とし、学びたい職員からスタートするのが最適だと思われる。まさに担当者はNIE活動のコーディネータ的役割を担っていると見えよう。

2つ目の課題として、新聞活用を各教科の年間計画にいかに盛り込むことができるかが課題として挙げられる。現場からは、「新聞を活用することは生徒も興味があってやってみたいが今日の記事を今日やるのは教材研究が間に合わない」「年間計画にないことをやるには気が引ける」「教科書をしっかりやって欲しいという声もあって使いにくい」といった声を聞く機会があった。新聞は論旨が明確で読者に分かりやすい段落構成になっているため、教材としては使いやすいが、新聞を活用することで育てられる力が浸透しないが故にせつかくの教材が十分に学習に生かし切れていない実態も浮上した。課題の1つ目と同様に年間計画に盛り込む方法を職員と共に探っていき、児童生徒の思考力や表現力の向上に繋げていきたい。

2017 (平成 29)年度N I E実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL/FAX	備考
1	市川市立大和田小学校	青山 了司	流 雄希	〒 272-0025 市川市大和田 1- 1- 3	047-378-5001 047-378-5032	27～ 29年度
2	野田市立東部中学校	飯森 淳	伊藤 圭哉	〒 278-0001 野田市目吹 1500	04-7122-3015 04-7122-3371	28・ 29年度
3	八街市立笹引小学校	内山 茂樹	佐藤 一馬	〒 289-1113 八街市八街へ 199- 133	043-444-0049 043-444-0467	28・ 29年度
4	茂原市立早野中学校	若菜 功	市原 剛志	〒 297-0037 茂原市早野 206- 1	0475-25-0951 0475-25-9375	28・ 29年度
5	南房総市立富浦中学校	袴田 晃宏	小池 宏	〒 299-2416 南房総市富浦町青木 249- 1	0470-33-2075 0470-33-4729	28・ 29年度
6	千葉市立打瀬中学校	小川 好信	石井 美佳	〒 261-0013 千葉市美浜区打瀬 3- 12- 1	043-211-0344 043-299-2832	28・ 29年度
7	専修大学松戸高等学校	小泉 毅	山口 恵子	〒 271-8585 松戸市上本郷 2- 3621	047-362-9101 047-362-9104	28・ 29年度
8	八千代市立勝田台南小学校	吉原 幸子	掛川 良治	〒 276-0023 八千代市勝田台 5- 9	047-483-0286 047-483-0022	29・ 30年度
9	船橋市立芝山中学校	日高祐一郎	駒野 和典	〒 274-0816 船橋市芝山 1- 40- 11	047-464-3448 047-464-3449	29・ 30年度
10	我孫子市立我孫子第三小学校	野口 恵一	浅水 美記	〒 270-1176 我孫子市柴崎台 3- 3- 1	04-7184-1171 04-7184-1180	29・ 30年度
11	松戸市立新松戸南中学校	小出 斉	横川 徹	〒 270-0035 松戸市新松戸南 2- 124	047-344-0188 047-345-0626	29・ 30年度
12	富里市立日吉台小学校	松島 馨	滝澤 文洋	〒 286-0201 富里市日吉台 4- 21	0476-93-6369 0476-93-6364	29・ 30年度
13	旭市立干潟中学校	鈴木 弘	杉山耕一郎	〒 289-0515 旭市入野 2170	0479-68-2456 0479-68-4139	29・ 30年度
14	いすみ市立東海小学校	田中 憲生	大高 純子	〒 298-0001 いすみ市若山 1042	0470-62-0269 0470-62-4290	29・ 30年度
15	山武市立蓮沼中学校	井内 毅	千田 賢弥	〒 289-1806 山武市蓮沼ハ- 1036	0475-86-2037 0475-86-2176	29・ 30年度
16	富津市立天神山小学校	鈴木マユ美	植田 正代	〒 299-1618 富津市花輪 104	0439-67-0062 0439-67-2060	29・ 30年度
17	富津市立大貫中学校	和田 俊昭	三平 正美	〒 293-0043 富津市岩瀬 619	0439-65-0053 0439-65-2124	29・ 30年度
18	千葉市立大森小学校	黒川 章子	山本 慧一	〒 260-0811 千葉市中央区大森町 268	043-261-3445 043-268-5886	29・ 30年度
19	千葉市立磯辺中学校	増澤 保明	櫻井 翔	〒 261-0012 千葉市美浜区磯辺 7- 1- 1	043-279-2891 043-278-4913	29・ 30年度
20	千葉県立成田国際高等学校	渡邊 信治	宮本 修	〒 286-0036 成田市加良部 3- 16	0476-27-2610 0476-26-7154	29・ 30年度
21	千葉県立桜が丘特別支援学校	佐々木隆之	石川 美雪	〒 264-0017 千葉市若葉区加曾利町 1538	043-231-1449 043-231-3069	29・ 30年度

継続

新規

2017（平成29）年度 千葉県N I E推進協議会 役員

会 長	藤 川 大 祐	千葉大学教授・教育学部副学部長
副 会 長	藤ヶ崎 功	千葉県小学校長会会長
副 会 長	羽山 稔彦	千葉県中学校長会会長
副 会 長	百瀬 明宏	千葉県高等学校長協会会長
顧 問	内 藤 敏 也	千葉県教育委員会教育長
顧 問	磯野 和美	千葉市教育委員会教育長
幹 事	小 林 久 子	千葉県小学校長会副会長
幹 事	本 山 哲 也	千葉県中学校長会副会長
幹 事	小 野 祐 司	千葉県高等学校長協会副会長
幹 事	片 岡 通 有	千葉県教育庁指導課主幹
幹 事	渡 邊 安 規	千葉県教育庁指導課指導主事
委 員	村 上 宣 雄	朝日新聞社 千葉総局長
委 員	菊 池 一 郎	産経新聞社 千葉総局長
委 員	小 國 智 宏	東京新聞社 千葉支局長
委 員	池 内 新 太 郎	日本経済新聞社 千葉支局長
委 員	篠 瀬 祥 子	日刊工業新聞社 千葉支局長
委 員	千代崎 聖史	毎日新聞社 千葉支局長
委 員	森 昭 雄	読売新聞社 千葉支局長
委 員	佐々木 昌巳	時事通信社 千葉支局長
委 員	高 橋 潤	共同通信社 千葉支局長
委 員	中 元 広 之	千葉日報社 編集局長
監 査	（原則、各新聞社による九社会幹事）	
アドバイザー	石 毛 一 郎	県立佐原高等学校教諭
アドバイザー	内 山 浩 史	県立佐倉高等学校教諭
アドバイザー	松 井 初 美	香取市立小見川中学校教諭
アドバイザー	武 藤 和 彦	市川市立東国分中学校教諭
アドバイザー	神 尾 啓 子	千葉県新聞教育研究所主宰
事務局 長	渡 辺 鉦	千葉日報社読者サービス室長

2018 (平成 30)年度N I E実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL/FAX	備考
1	八千代市立勝田台南小学校	吉原 幸子	辻村 千晶	〒276-0023 八千代市勝田台5-9	047-483-0286 047-483-0022	29・ 30年度
2	船橋市立芝山中学校	日高祐一郎	駒野 和典	〒274-0816 船橋市芝山1-40-11	047-464-3448 047-464-3449	29・ 30年度
3	我孫子市立我孫子第三小学校	鈴木与志実	浅水 美記	〒270-1176 我孫子市柴崎台3-3-1	04-7184-1171 04-7184-1180	29・ 30年度
4	松戸市立新松戸南中学校	小出 斉	石原 稔	〒270-0035 松戸市新松戸南2-124	047-344-0188 047-345-0626	29・ 30年度
5	富里市立日吉台小学校	松島 馨	滝澤 文洋	〒286-0201 富里市日吉台4-21	0476-93-6369 0476-93-6364	29・ 30年度
6	旭市立干潟中学校	齊藤 実	杉山耕一郎	〒289-0515 旭市入野2170	0479-68-2456 0479-68-4139	29・ 30年度
7	いすみ市立東海小学校	田中 憲生	大高 純子	〒298-0001 いすみ市若山1042	0470-62-0269 0470-62-4290	29・ 30年度
8	山武市立蓮沼中学校	井内 毅	千田 賢弥	〒289-1806 山武市蓮沼ハ-1036	0475-86-2037 0475-86-2176	29・ 30年度
9	富津市立天神山小学校	鈴木マユ美	植田 正代	〒299-1618 富津市花輪104	0439-67-0062 0439-67-2060	29・ 30年度
10	富津市立大貫中学校	和田 俊昭	山崎 康成	〒293-0043 富津市岩瀬619	0439-65-0053 0439-65-2124	29・ 30年度
11	千葉市立大森小学校	黒川 章子	山本 慧一	〒260-0811 千葉市中央区大森町268	043-261-3445 043-268-5886	29・ 30年度
12	千葉市立磯辺中学校	増澤 保明	櫻井 翔	〒261-0012 千葉市美浜区磯辺7-1-1	043-279-2891 043-278-4913	29・ 30年度
13	千葉県立成田国際高等学校	渡邊 信治	宮本 修	〒286-0036 成田市加良部3-16	0476-27-2610 0476-26-7154	29・ 30年度
14	睦沢町立睦沢小学校	阿部倉光宏	積田 裕子	〒299-4415 長生郡睦沢町小滝450-1	0475-44-0009 0475-44-2830	30・ 31年度
15	市原市立清水谷小学校	小野寺源彦	阿部 広樹	〒290-0142 市原市ちはら台南5-2	0436-52-3681 0436-52-3691	30・ 31年度
16	鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷中学校	小林 修一	大塚 功祐	〒273-0101 鎌ヶ谷市富岡1-2-1	047-444-0456 047-444-0457	30・ 31年度
17	昭和学院秀英中学校高等学校	鈴木 政男	秋葉 亜紀	〒261-0014 千葉市美浜区若葉1-2	043-272-2481 043-272-4732	30・ 31年度
18	松戸市立松戸高等学校	浅田 勉	瀬和真一郎	〒270-2221 松戸市紙敷2-7-5	047-385-3201 047-385-3467	30・ 31年度
19	千葉県立君津青葉高等学校	安西 聖依	根本 哲一	〒292-0454 君津市青柳48	0439-27-2351 0439-27-2146	30・ 31年度
20	千葉県立仁戸名特別支援学校	渡辺あけみ	高橋 智子	〒260-0801 千葉市中央区仁戸名町673	043-264-5400 043-268-5082	30・ 31年度
21	千葉県立四街道特別支援学校	平野 洋一	石川 美雪	〒284-0003 四街道市鹿渡934-45	043-422-2609 043-424-4679	30・ 31年度

継続

新規

2018（平成30）年度 千葉県N I E推進協議会 役員

会 長	藤 川 大 祐	千 葉 大 学 教 育 学 部 教 授
副 会 長	中 村 祥 一	千 葉 県 小 学 校 長 会 会 長
副 会 長	本 山 哲 也	千 葉 県 中 学 校 長 会 会 長
副 会 長	廣 部 泰 紀	千 葉 県 高 等 学 校 長 協 会 会 長
顧 問	澤 川 和 宏	千 葉 県 教 育 委 員 会 教 育 長
顧 問	磯 野 和 美	千 葉 市 教 育 委 員 会 教 育 長
幹 事	池 田 亘 宏	千 葉 県 小 学 校 長 会 副 会 長
幹 事	大 野 治 充	千 葉 県 中 学 校 長 会 副 会 長
幹 事	山 崎 成 夫	千 葉 県 高 等 学 校 長 協 会 副 会 長
幹 事	佐々木 隆之	千 葉 県 特 別 支 援 学 校 長 会
幹 事	鶴 岡 利 明	千 葉 県 教 育 庁 学 習 指 導 課 主 席 指 導 主 事
幹 事	渡 邊 安 規	千 葉 県 教 育 庁 学 習 指 導 課 指 導 主 事
委 員	村 上 宣 雄	朝 日 新 聞 社 千 葉 総 局 長
委 員	齋 藤 浩	産 経 新 聞 社 千 葉 総 局 長
委 員	小 國 智 宏	東 京 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	池 内 新 太 郎	日 本 経 済 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	篠 瀬 祥 子	日 刊 工 業 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	木 戸 哲	毎 日 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	森 昭 雄	読 売 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	佐々木 昌 巳	時 事 通 信 社 千 葉 支 局 長
委 員	高 橋 潤 之	共 同 通 信 社 千 葉 支 局 長
委 員	中 元 広 之	千 葉 日 報 社 編 集 局 長
監 査	（原則、各新聞社による九社会幹事）	
アドバイザー	石 毛 一 郎	県 立 成 田 国 際 高 等 学 校 教 諭
アドバイザー	内 山 浩 史	県 立 佐 倉 高 等 学 校 教 諭
アドバイザー	松 井 初 美	香 取 市 立 小 見 川 中 学 校 教 諭
アドバイザー	武 藤 和 彦	市 川 市 立 市 川 第 二 中 学 校 教 諭
アドバイザー	神 尾 啓 子	千 葉 県 新 聞 教 育 研 究 所 主 宰
事務局長	渡 辺 敏	千 葉 日 報 社 読 者 サ ー ビ ス 室 長